

十勝開拓と川

第4章

十勝開拓の年表 154

はじめに 北海道、そして十勝の分かれ方 156

1. 生まれた土地をはなれて十勝へ

- ① 太平洋沿岸から内陸へ 158
 - ② 受刑者たちが開いた「大津街道」 160
 - ③ 開かれる開拓地への「入口」 162
 - ④ どうして生まれた土地をはなれたの? 164
 - ⑤ 団体をつくって開拓する 166
 - ⑥ 生きるための学校、学校の中の生活 168
- コラム 赤い着物の受刑者たち 161
許可をもらわないうで開拓 163
開いても自分の土地にはならなかった 165
土間にむしろをしいて 169
こおって足が入らなくつ 169
十勝へ来る先生も大変だった 169

2. 進む開拓と川

- ① 今とはちがう明治時代の「十勝川」 170
 - ② 開拓者の暮らしと川 172
 - ③ サケの人工ふ化 174
 - ④ 川は「幹線道路」…川舟 175
 - ⑤ 川をわたるための「渡船」 176
 - ⑥ 川が運ぶ木材…流送 180
 - ⑦ 渡船から木橋、そしてコンクリートの橋へ 182
 - ⑧ 鉄道の開通、消えていく川舟 184
 - ⑨ 戦後も進んだ開拓 185
- コラム 朝夕の魚とり 173
海の道と川の道 178
さようなら旧十勝大橋 183

3. 開拓者をおそう洪水・そして新水路づくりへ

- ① 川に飲みこまれる開拓地 186
 - ② 十勝川切りかえの対立 188
 - ③ 人がつかった十勝川…統内新水路 190
 - ④ 水田に水が引けるよう…千代田堰堤 194
- コラム 明治31年の大洪水の思い出 187
アイヌの人たちによる救助 187
古い地形図を見る 189
“この川さえ無かったらなア” 192
米を食べるのは特別なこと 195

4. 開拓期は戦争の時代

- ① 人が、そして馬も戦場へ 196
- ② 十勝空襲と敗戦 197

5. 開拓者の心や思いと川

- ① 開拓者たちの信仰 198
- ② 水の神、灯ろう流しや雨ごい 200
- ③ 和人がつけた川の名前 201

十勝開拓の年表

明治に入って蝦夷地は「北海道」となります。十勝では、明治29年(1896)に「殖民地解放」がおこなわれ、開拓が一気に進みます。

11世紀(約1千年前)から今までの年表

平安時代	鎌倉時代	室町時代
11世紀 擦文時代 1千年前 一〇八七 藤原氏東北支配 一〇八三 後三年の役 一〇七〇 北奥合戦 一〇五一 前九年の役	12世紀 二二〇〇 安藤氏、エゾ管領に 二一九〇 交易商人 漂流者などが北海道へ 二一九〇 重罪人が北海道へ 二八九 藤原氏、滅ぼされる	13世紀 一三三二 安藤氏の乱(一八) 一三三二 安藤氏の乱(一八)
	14世紀 アイヌ文化期 一三三二 安藤氏の乱(一八)	15世紀 一四五七 アイヌ民族と和人、何度も戦った(一五五〇) 一四五七 アイヌ民族と和人、何度も戦った(一五五〇) 一四五七 武田氏、蠣崎氏となる 一四五七 シヤマインの戦い 一四五七 武田氏、北海道へ

第1章 十勝の平野や川ができたのはいつ

第2章 先史時代と川

1860年から昭和35年(1960)までの年表

江戸時代	明治時代	開拓期
1860 一八五九 箱館(函館)開港(貿易も) 一八五八 松浦武四郎、十勝(新得)帯広(大津)大樹(札内)大津(ほか北海道へ)	1870 明四(一八七〇) 大津に静岡から団体移民。十勝国開拓使に属す 明三(一八七〇) 十勝国、静岡藩と田安家一橋家が支配 明二(一八六九) 十勝国、静岡藩と鹿兒島藩(とろろ)鹿兒島藩返上 明一(一八六九) 蝦夷地(北海道)となる(国郡制(定寄郡は釧路国)) 明二(一八六九) 開拓使設置(明一五)	1890 明二(一八九〇) 渡船転覆し、児童6人が死ぬ。雪とけ水で大きな被害。青森県からシントクへ、石川県から下浦幌へ移民団体 明四(一九〇七) 富山県からハンペン(シリ)へ移民団体 明三(一九〇七) 旭川・帯広・釧路間の鉄道開通。止る製炭(タン)シントク 明二(一九〇六) 福山県からシントクへ、長野県から上浦幌へ移民団体 明一(一九〇五) 釧路・帯広間 鉄道開通。神奈川県からハンケン(シリ)へ移民団体 明三(一九〇四) 十勝川、大洪水 明二(一九〇三) 釧路・浦幌間に鉄道開通。十勝川本支流、大洪水 明三(一九〇二) 関又、リクワン(ハツ)開墾 明二(一九〇〇) 高知県 福井県からシントク・サホロへ移民団体、福島県から美里別へ移民団体 明一(一九〇〇) 帯広(サケ)の島。十勝川、利別川大洪水。直別に黒岩農場。山形県からシントクへ移民団体 明二(一九〇〇) 移民団体多数。千野農場。 明一(一九〇〇) 札内川に栗山橋。十勝川で大洪水 明二(一九〇〇) 札内川に栗山橋。十勝川で大洪水 明一(一九〇〇) 帯広尋常小学校。十勝川・利別川がはんらん 明二(一九〇〇) 十勝の殖民地解放。移民団体多数。木野村農場、池田農場、高島農場 明三(一九〇〇) 十勝分監できる。大阪から上麻布へ移民団体。滋賀県から下当縁へ農場。又ツブク川にサケの島化場 明四(一九〇〇) 十勝分監建築のため、糠平から音更川で木材流送。増田立吉が水田試作(下土幌) 明五(一九〇〇) 徳島県から藩派へ板東農場、富山県から伏古へ移民団体 明六(一九〇〇) 徳島県から藩派へ板東農場、富山県から伏古へ移民団体 明七(一九〇〇) 徳島県から藩派へ板東農場、富山県から伏古へ移民団体 明八(一九〇〇) 大津街道開かれる(明二六)。大津にマツチの軸木工場 明九(一九〇〇) 武山士平、止若へ 明一〇(一九〇〇) 内田静から十勝国の原野を測定し、殖民地を測定 明一一(一九〇〇) 十勝漁業組合できる 明一二(一九〇〇) 北海道庁設置 明一三(一九〇〇) 札幌県、アイヌ民族に農業指導(明三三) 明一四(一九〇〇) 晩成社、下帯広へ。札幌県、十勝川をさかのぼったサケの漁を禁止。洪水 明一五(一九〇〇) 河川はらん 明一六(一九〇〇) 札幌県設置(明一九)。大雪でシカが大量死。三浦等六、利別太へ。細谷十太夫、止若へ 明一七(一九〇〇) 茂寄に公立の広尾学校。大津に公立の簡易教育所。三浦等六、大津へ 明一八(一九〇〇) 大津に茂寄に戸長役場。十勝組合解散。大川宇八郎、音更村ムムへ 明一九(一九〇〇) 大雪でシカが大量死。武田菊平、利別太へ。細川繁太郎、中足寄へ 明二〇(一九〇〇) 十勝組合(明一三) 明二一(一九〇〇) 十勝組合(明一三)

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さへん

明治29年(1896)のおもな大農場と団体移民(順不同)
 池田農場(利別太・様舞)、高島農場(居辺・蓋派・信取)
 木野村農場(音更)、愛知団体(芽室太)、滋賀団体(下当縁)、
 兵庫県但馬団体(伏古別・然別)、函館の藤原農場(札内)、
 岡山県の吉備団体・中国団体(白人)、愛知団体(美蔓)、
 岐阜団体(美生中島・亮賢)、福井県青山団体(下利別)、
 石川団体(毛根・西土狩)、岐阜農場・熊谷農場(下浦幌)

明治30年(1897)のおもな大農場と団体移民(順不同)
 美濃開墾合資会社農場(土幌・毛根中島)、利別農場(洞寒・勇足)、
 興復社(牛首別)、堺農場(長節)、函館農場(仙美里)、
 利別農場(洞寒・勇足)、近藤農場(育素多)、桑名農場(下幌岡)
 仁礼農場(音更)、富山県矢部団体(音更)、岐阜県武儀団体(中土幌)、
 富山県江波団体(下音更・上音更)、新潟県の田中清助農場(下当縁)、
 三重県の南勢開拓合資会社(猿別)、石川県加賀団体(野塚・札内)、
 福井県越前団体(札内・伏古別・土幌)、千葉県団体(長節)、
 富山県団体(幸農)、愛知団体(上毛根)、板東農場(下利別)、
 土田農場(生剛)

明治31年(1898)のおもな大農場と団体移民(順不同)
 桐洞農場(歴舟)、十勝開墾合資会社農場(人舞・熊牛)、
 森農場(下浦幌)、千野農場(下音更)、音幌農場(下土幌)
 富山県江波団体(ペンケチン)、愛知県尾張団体(下歴舟)、
 富山県伍位団体(糠内)、香川県讃岐団体(ベケレベツ)、
 三重県伊勢団体(上亮賢)、岐阜県別府団体(上帯広)、
 石坂農場(下歴舟)、富山県団体(農野牛・糠内)

注 農場の場合、実際に小作人が入植するのはあとになる場合もあります

・1868 明治維新
 ・1871 鹿藩置県
 ・1894 日清戦争
 ・1899 北海道旧土人保護法
 ・1898 十勝に徴兵令
 ・1904 日露戦争

はじめに 北海道、そして十勝の分かれ方 … 「釧路国」だった足寄郡

● 北海道の移り変わり

江戸時代の北海道は南西部（道南）の一部（和人地）をのぞいて、ほとんどがアイヌ民族の土地（蝦夷地）でした。アイヌ民族は野や山をだれかの「所有」とはせず、植物や動物をとって生活を

支える場（イオル）として「利用」していました。和人は、蝦夷地を「場所」に分け、それぞれの海ぞいに拠点を置いて交易を支配しました。

明治時代に入って北海道全体が日本国の領土とされ、和人による支配や管理が内陸にもおよび、開拓が進みます。和人の移住や開拓の進みぐあいによって、北海道の分け方は変わっていきました。



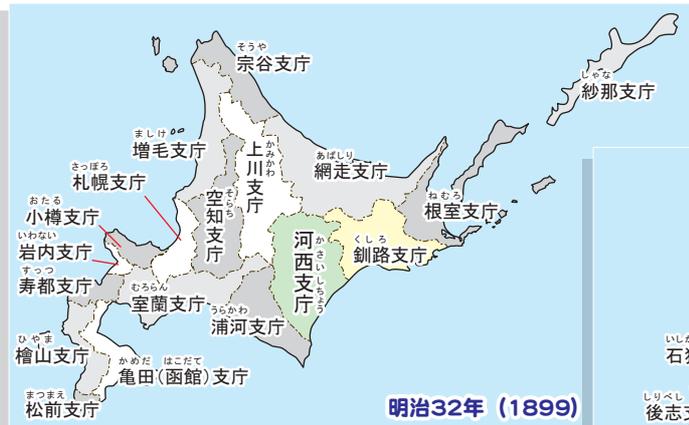
江戸時代、北海道は東西（太平洋側と日本海側）の「蝦夷地」と「和人地（松前藩）」に分けられ、交易支配のため「場所」という区分があった。（→p137）
 （『北海道場所請負制度の研究』・『アイヌの歴史と文化Ⅰ』より、改変）



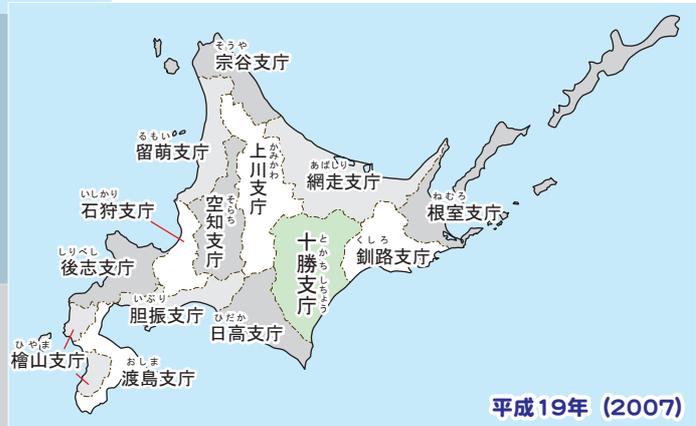
明治2年(1869)、開拓使は松浦武四郎(※1)の案をもとにして、蝦夷地全体を「北海道」とし、11国(86郡)に分けた。足寄郡は釧路国に(※2)入れられた。十勝国は、日高国の浦河支庁や、札幌本庁(浦河ほか十郡として)などに管理された。



明治15年(1882)、開拓使はなくなり、北海道は3つの県に分けられた。十勝は札幌県にふくまれた(足寄郡は根室県)。この「三県一局時代」は4年で終わり、明治19年(1886)、北海道全体を北海道庁(札幌)が管理することになった。



明治20年(1887)、十勝国は、浦河郡役所(浦河町)から釧路郡役所(釧路市)の管理となる。明治30年(1897)、北海道庁は郡役所をなくし、18支庁を設置した。十勝は河西支庁の管理となる(足寄郡は釧路支庁)。図は明治32年(1899)のようす。



昭和7年(1932)、河西支庁は十勝支庁となる。昭和23年(1948)、足寄郡は十勝支庁管内に入る。図は、平成19年(2007)現在のもの。14支庁ある。

※1 松浦武四郎(まつうらたけしろう)：幕末の探検家(→p142)。明治2年(1869)開拓使蝦夷開拓御用掛(かいたくしえそごようがかり)、さらに開拓判官(かいたくはんがん)になるが、翌年、開拓使のアイヌ政策に失望し、職をやめる。

第1章 十勝の平野と川がてらゆめはつて
 第2章 先史時代と川
 第3章 アイヌ文化と川
 第4章 十勝開拓と川
 第5章 発展、今、そして未来へ
 用語
 さくせん

1. 生まれた土地をはなれて十勝へ

地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん

太平洋沿岸から内陸へ



1855年、トカチ場所にあった和人の施設。もちろん、これ以外にアイヌの人々の集落(p126)があった。(参考:「安政2年杉浦嘉七のトカチ場所絵図」井上寿)



アイヌの人のところへシカの毛皮を買い取りに来た和人。(上徳善七が描かせた絵。ただし、上徳善七は明治26年(1886)に入植)
(上徳善司氏蔵)

江戸時代、十勝地方は松前藩により「トカチ場所」とされ、藩や商人とアイヌ民族が交易をしていました。17世紀中ごろまではトカチ(=トカチプト=浦幌町十勝太)が交易拠点となっていました。(p137)

その後、トマリ(=ピロウ=広尾)に拠点が移りま。18世紀末には、ここでしばらく暮らす和人が心のよりどころとして、弁天堂や神社を建てています。

18世紀末にはヲホツナイ(オホツナイ=豊頃町大津)にも、拠点が置かれます。江戸時代末の19世紀中ごろには、大津も発展を見せはじめ、だんだんと和人が移り住むようになりました。

明治時代に入ると、大津を拠点にして、多くの和人が内陸に入っていくことになります。

シカ狩りで十勝内陸へ

明治8年(1875)、十勝の産業(漁業や狩り)と産物を管理する「十勝組合」ができ、内陸でのシカ狩りがさかんになります。それを知った和人たちが管理をなくすよう求めます。勝手に狩りをする(密猟する)和人もいました。

明治13年(1880)、十勝組合が解散すると各地から和人ハンターや毛皮商人が来て(密猟も多い)大津は栄えます。しかし、とりすぎと大雪によってシカは激減しました。多くの和人たちは立ち行かなくなって十勝を去りましたが、十勝に住みついて農業を始めた人もいました。(p145)

十勝内陸に移住した人々

明治12年(1879)には、馬場猪之吉がオベリベリ(帯広市)のアイヌ民族の長であるモチャロクのところに仮住まいしたあと、モッケナシ(音更町)に移住しました。

同年、武田菊平が蝶多(千代田:池田町)に、細川繁太郎が中足寄(足寄町)に移住し、また、明治13年(1880)には大川宇八郎がメム(音更町)に移住しています

さらに、明治15年(1882)には三浦等六が大津から利別太(池田町)に、細谷十太夫が止若(幕別町)に、また、明治18年(1885)には宮崎濁卑が伏古(帯広市)に、それぞれ移住しました。

そして、明治16年(1883)、「晩成社」13戸27人がオベリベリ(下帯広村:帯広市)に移住しました。(p143)



左に書いた入植者たちの入植地。(地図は今のもの)

1 大川宇八郎(おおかわはちろう): 岩手県出身、明治10年(1877)に北海道へ、日高地方で行商をした。明治12年(1879)山ごえで十勝に入り、十勝川を下ってオベリベリ(帯広)のモチャロクの家に仮住まいした。翌年、日高に帰った後、再び十勝に来た。

2 宮崎濁卑(みやざきだくひ): 札幌県によるアイヌの人に対する農業指導のために十勝に来た(p148)。農業指導は明治22年(1889)に終わるが、その後も住みつき、出身地である富山県の人をさそって開拓を続けた。

十勝内陸農業のはじまり ... 武田菊平の移住

武田菊平は、1828年、今の山梨県に生まれました。明治に入って函館にわたり、木材業などで成功しましたが、明治11年(1878)、火災にあって財産を失いました。

次の年、菊平はもう一度立て直そうと十勝にやってきました。当時、十勝のシカ皮やシカ角の商売は、かなり有名だったのです(p145)。

十勝にやってきた菊平は、アイヌの人たちとシカ皮の交易をしながら、かたわらで農業経営を始めたようです。場所は蝶多(池田町千代田)でした。

菊平は、明治16~17年(1883~84)ころには専業農家となり、およそ6千坪(約2畝)の畑を開いて、トウモロコシや豆、タマネギなどを栽培しました。

なお、菊平のもとに入地した鈴木久八の息子さんの話によると、「武田菊平というのは仮の名で、佐野が本当の姓」だということです。

菊平の農場には、晩成社の鈴木銃太郎も見学に来ています。菊平の農場が、和人による十勝内陸農業の始まりとっていいでしょう。

武田菊平は、明治18年(1885)に、58歳でその生涯を終えています。十勝に来て7年目のことでした。



武田菊平は山梨で生まれ、函館で火事にあったあと、十勝にきた。



(左)明治時代の「蝶多村」。

(右)平成時代の千代田。



(2枚の地図は国土地理院所蔵・刊行の1/5万地形図(止若・十勝池田)を使用)

今の千代田(池田町)のようす。

もう少し細かいこと

チブ(舟)に乗せてもらって内陸へ

明治のなかばころまでは、十勝内陸部に広い道はありません(ただし、海岸ぞいの道は江戸時代終わりころからありました)。

アイヌの人たちにとっては、川が大きな交通路であり、道は丘や山など、水量の少ないところへ入る時に使われるものでした。(その後、開拓が進んだ明治30年代の和人にとっても、川は大切な交通路でした: p175)

十勝へ来た和人たちが内陸を移動するためには、アイヌの人たちの丸木舟(チブ)が重要な交通手段になります。多くの移住者が、この丸木舟の世話になりました(p129・p143)。

また、当時の十勝は、ほとんどがうっそうとした森とめった草原でした。初めてやって来た時には、アイヌの人の道案内なくしては、行きたいところへも行けなかったことでしょう。

さらに、家だっすぐに建てられるわけではありません。明治前半に移住した和人の多くは、アイヌの人の家を借りたり、ゆずり受けたりすることで、人ごちつけました。

そのほか、売り物になる毛皮や角を手に入れたり、川魚をもらったり、とり方を教えてもらったり、畑の手伝いをしてもらったりと、アイヌの人たちのおかげでとても助かりました。

明治2年、十勝に和人による地名がつく

明治2年(1869)「蝦夷地」が「北海道」と名前を変え、北海道各地の地名もつけられました。これらは、当時開拓使に勤めていた、松浦武四郎の考えをもとに決められました。

十勝は「十勝国」となり、広尾、当縁、中川、上川、河東、河西、十勝の7郡に分かれ、さらに51の村名がつけました。当時、今の陸別町と足寄町の東側は釧路国に入っていました。

地名は、基本的にアイヌ語の地名や河川名を漢字に当てはめたものでした。(国・郡 p157)(アイヌ語地名 p127)

十勝初の役場は広尾、そして大津に

このころの役場は、日本国から任命された「戸長」が取りしきるもので、「戸長役場」と呼ばれます。

明治13年(1880)、大津村に「十勝外四郡戸長役場」が、茂寄村に「広尾当縁両郡戸長役場」が置かれました。

どちらも、かつて「トカチ場所」があったころ、交易や漁場の中心であり、移住する人たちの玄関口となっていました。

ちなみに「十勝外四郡」とは、十勝郡・中川郡・河西郡・河東郡・上川郡のことです。(p157)

3 松浦武四郎(まつうらたけしろう):幕末の探検家(p142)、明治2年(1869)開拓使蝦夷開拓御用掛(かいたくしよぞごようがかり)さらに開拓判官(かいたくはんがん)になるが、翌年、開拓使のアイヌ政策に失望し、職をやめる。

4 釧路国に(くしろのくにに):足寄町の利別川にかかる両国橋(りょうこくばし:国道241号)の「両国」は、この橋が十勝国と釧路国をつなぐことから名づけられたという。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

受刑者たちが開いた「大津街道」

地域産業

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



明治29年(1896)発行の地形図。(国土地理院所蔵の1/5万地形図(帯広・止若)を使用。大津街道に茶色く着色)



平成9年(1997)発行の地形図。赤い点線が大津街道だったところ。写真は、国道38号と旧大津街道の交差点(幕別町札内中央町)。(地図は、国土地理院刊行の1/5万地形図(帯広・十勝池田)を使用)

明治時代の前半までは、海岸ぞいを除いて、十勝に整備された広い道はほとんどありませんでした。

明治25年(1892)、北海道集治監(今の刑務所)釧路分監(支所)の受刑者700人がやって来ました。

彼らは十勝川ぞい5ヵ所に分かれ、大津(豊頃町)から芽室を結ぶ「大津街道」を開きました。2年でおおよそ70kmの道を切り開いたのです。

大津街道ができて、まだまだ十勝川を使った川舟が交通輸送の中心でした。しかし、街道の通行にはお金がかからず、十勝内陸をめざす開拓者や舟着き場まで農産物を運ぶ人たちにとって、大きな意味を持ちました。

今も生きる大津街道

大津街道は少しルートを変え、改良されながら、今でも重要な道となっています。

芽室坂(幕別町) - 茂岩(豊頃町)間の国道38号、札内と猿別をつなぐ道道503号(明倫幕別停車場線)、それに、茂岩 - 大津をつなぐ道道320号(旅来豊頃線)と911号(大津旅来線)がそれにあたります。

道路工事を終えた受刑者たちは、次に「十勝分監(刑務所支所)」を、今の緑ヶ丘公園周辺(帯広市)につくります。

明治28年(1895)、十勝分監(8年後に十勝監獄)ができあがりました。

農地を開き、鉄道をつくる

監獄の受刑者たちは、帯広に農地を開きます。また、監獄で作られる、日用品、農機具、建具などさまざまなものが、十勝に移住してきた人たちの生活を支えました。十勝石(黒曜石: p33・p75)の細工も、ここが始まりです。また、それらをつかう商人や監獄関係者が住むことで、帯広市街が発展していきます。十勝監獄の受刑者たちは、今でいう帯広市の大通りにあたる道や糠平(上土幌町)へぬける道などの道路工事をおこなったほか、裁判所や十勝公会堂や学校など、さまざまな建物を建て、鉄道づくりや河川工事でも活やくしました。ただし、そのあつかいはきびしく、作業などで死んだ人も少なくはありません。



(上) 今も残る十勝監獄の石油庫。(帯広市緑ヶ丘公園)



(右) 受刑者が作った、十勝石製のワエルの置物。(帯広百年記念館蔵: 4)

1 受刑者(じゅけいしや): 犯罪をおかし、裁判の結果、刑務所(けいむしょ)に入れて自由をうばわれた人。北海道の集治館(しゅうじかん: 刑務所)には罪の重い人が入れられた。政治犯(政府にはげしく反対した人)も入れられた。

2 大津街道(おおつかいどう): そのほか、猿別 - 明野(幕別町)の間は曙通(あけぼのどおり)にあたる。
3 十勝分監(とちふんかん): 正式には「北海道集治監十勝分監(ほっかいどうしゅ

木材は音更川が運ぶ ... 木材の流送

十勝分監（十勝監獄）をつくるための材料は、音更川をさかのぼった糠平（上士幌町）あたりの山で木材を切って、手に入れました。この木材は、音更川の流れに乗せて、今の木野市街（音更町）あたりまで流されました（流送という p180）。

引き上げられた木材は、少し加工されてから十勝川を舟でわたり、「木のレール」を走るトロッコで、今の緑ヶ丘（帯広市）まで運ばれました。

分監（監獄）ができたあとには、帯広周辺のさまざまな建物をつくるための材料が、同じように運ばれました。

大正時代には、製紙用の木材を切り出した業者のもとで、受刑者たちは糠平（上士幌町）に通じる道をつけます。非常に危険な工事でした。

開通後、十勝監獄は「音更山道碑」という石碑を建てました。国道273号ぞいに復元され、今も見るができます。



音更山道碑。上士幌町字黒石平。屏風岩の近く。



音更川の流れと、十勝監獄で木を切っていたところ(□)。(地図の川や市町村は今のもの)



夏の音更川、糠平ダム下流（上士幌町糠平）。



秋の音更川、萩ヶ岡橋上流・セタ川合流点付近（上士幌町萩ヶ岡）。



音更川、十勝新橋上流（音更町木野・宝来）。今の木野東小あたりで木材を引きあげた。

赤い着物の受刑者たち ... 受刑者が建てた小学校

十勝分監（十勝監獄）の受刑者たちは、明治29年（1897）には帯広尋常小学校（帯広小学校）を建てています。帯広だけではありません。

平成7年（1995）に閉校した青山小学校（池田町）の始まりは、明治35年（1902）にできた下利別簡易教育所でした。明治39年（1906）に、下利別尋常小学校になります。周囲が発展するにしたがって生徒の数が増え、校舎がせまくなったため、新しい校舎が建てられることになりました。

当時、子どもだった人の思い出です。

「私が六歳の時、赤い着物を着た人が大勢ならんで私の家の方に来たので、私は驚いて家へ飛びこんで祖母にしがみついたことをおぼえている。

祖母の話によると帯広の十勝監獄の囚人（受刑者）が新しい学校を建てに来ているのだと言った。夏の暑い日だったので川に汗を流しにつれてこられたのだ。（中略）

その当時としては実にりっぱな学校だったにちがいない。教室は二つ、職員室と昇降口をかねて物置もあった」（藤山諭さんの話。『開校六十周年記念誌』1961より。「池田町開拓夜話」）

こうして明治41年（1908）に新しい下利別尋常小学校ができました。

十勝の開拓、そして発展には、開拓者たちの努力のほか、重罪人としてつかまり、刑を受けていた監獄受刑者たちの力も大きかったのです。

うじかんとかちぶんかん」。集館とは、おもに重罪人や激しく政府に反対した人を集めた刑務所（けいむしょ）。きびしく働かされ、命を失う受刑者も多かった。

4 帯広百年記念館（おびひろひやくねんきねんかん）：帯広市緑ヶ丘2 電話：0155-24-5352

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

開かれる開拓地への「入口」

地域産業

第1章 十勝の平野や川がでざるまで



小屋づくりをする入植者。明治26年(1893)、蓋派(池田町大森)に入植した上徳善七が、のちに描かせた絵。(上徳善司氏蔵)

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん

北海道のほとんどの土地は、日本国の土地(国有地)となりました。北海道庁は、明治21年(1888)に、開拓するための土地(殖民地)を選び、その後、測量して区画(きちんと区切ること)します。開拓者に土地を貸して開拓させ、10年後に売りわたす計画でした。

ただ、十勝の殖民地は、すぐには貸しつけが始まりませんでした。にもかかわらず、十勝の開拓は進みました。

十勝には、許可をもらわないで開拓を始める人(無願開墾者)がいたのです。利別太(池田町利別) 唼別(幕別町相川) 伏古別(帯広市北) 紋別(広尾町)などには、多くの無願開墾者が入地、開拓しました。

例えば、幕別町の土台は、明治25年(1892)に、香川県や徳島県から移住した人たちがつくったといわれます。

アイヌの人の土地を借りる

明治18年(1885)から、アイヌの人たちに農業をさせようとした「勸農事業」があり、芽室太(芽室町)や伏古(帯広市) 利別太(池田町)などの肥えた土地に、アイヌの人たちの耕作地がありました(p148)。

しかし、多くのアイヌの人たちが、農業を好まなかったため、和人がこの土地を借りることがよくありました。この土地を借りることができたことで、多くの和人が食えることができたといえます。

ものすごく安く借りることが多く、多くの問題が起きました。和人情の方が強く、アイヌの地主は土地に対する権利を失っていきました。(p149)



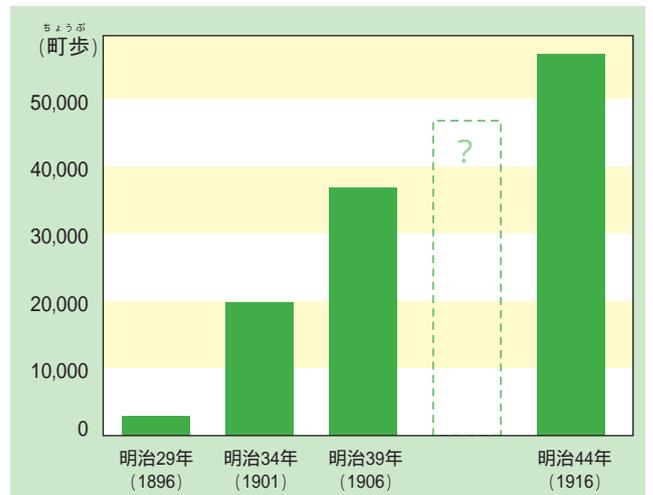
ケナシバコタン(池田町大森)のチセ(アイヌ民族の家)とトウキビ畑(明治29年[1896])。 (『池田町懐しのアルバム』より)

殖民地の解放

明治29年(1896)ようやく十勝地方で殖民地の貸しつけが始まりました。この時、すでに開拓していた人たちが、十勝全体で356戸、1,364人いました。

その後、明治30年(1897)には1人あたりの貸しつけ面積が増え、貸し賃も成功後の代金もただとなります。移住者はどんどん増え、明治39年(1906)には5,770戸になり、明治44年(1911)には1万700戸、耕地面積は5万6,600町歩(およそ560km²: 明治29年の20倍)にもなります。

開拓は、はじめは土の肥えた川ぞいの土地から進み(p172) そのあと、火山灰地(p58)である高台に移っていきました。



十勝の耕地面積。1町歩はおよそ1ヘクタール(100m × 100m)。

1 農業を好まないアイヌ民族のうぎょうをこのまないアイヌみんぞく): 伝統的なアイヌ文化にも農業はある。ただ、食料生産の中心ではなく、漁猟採集(ぎょうりょうさいしゅう)を補うものであった。また、明治時代の勸農政策の中、農業で成功したアイヌの人た

ちもいる。例えば、フシコ(帯広市北)アイヌの指導者である伏根弘三(ふしねこうぞう: 1874 - 1938) [アイヌ名: ホテネ]は、30人の和人をやとって農場経営をするなど経営者として成功し、私財をなげうってアイヌ民族復興のために努力した。(p149)

許可をもらわないで開拓 ... 新津繁松の「無願開墾」

新津繁松は長野県の生まれです。政治家を志しますが、資金がないため、開拓の中で財産をたくわえようと北海道にやってきます。

繁松のお孫さんの話です。

「この年（明治25年 [1892]）の十一月繁松は再び渡道し、利別太（池田町）に翌年春からの開墾のため草小屋を建て、冬の間釧路の知人宅に寄寓して春を待ったのです。

明治二十六年（1893）雪だけを待ってよいよ利別太にもどり小作人六人を入れ開墾に着手しましたが、道庁が十勝の原野を正式に貸しつけていない時の入植であったため、祖父の開拓は許可を得られない「無願開墾」であったのです。明治二十九年（1896）までに利別太の無願開墾者は六十五戸もいたそうです。

六町歩（約6 $\frac{1}{2}$ ）の土地に大豆と稲黍をまきました。そして八月に妻子をつれに長野県小海村にもどったのです。

しかしこの年は早々と霜にやられ、収穫はわずかに大豆六俵と言う不作で親子三人の生計も立たず、祖父は大津の熊谷酒店より酒を仕入れ、それをアイヌの捕獲した獣皮と交易して多少の利益を得て食物を手に入れたと言います。

しかし翌明治二十七年（1894）の春には困窮もその極に達し、祖父はフンペン山から下りてくる鹿をとらえて食し、雪のとけるころには草の根、蒨、ワラビと食べられる野草を常食とし、まさに飢えをしのいだと言うことです。

ようやく開墾の季節となって祖父は小作人とともに奮闘して十七町歩（約17 $\frac{1}{2}$ ）を開墾し、大豆、稲黍、菜豆類をまいだが、この年は豊作に恵まれやと愁眉を開いたそうです。

翌、明治二十八年（1895）も豊作で畑も三十七町歩（約37 $\frac{1}{2}$ ）となり将来に希望が持たれるようになったのです。

明治二十九年（1896）より十勝の未開原野の正式貸付けが開始されることになって、祖父たち無願開墾者は苦闘の開墾地を、改めて正式に貸付けられると思っていました。

ところが道庁は無願開墾はあくまでも違法行為だからと言って開墾地は没収となってしまったのです。

祖父は道庁に出向き、入植五ヶ年間の苦闘を訴え、また十勝を管轄していた根室の郡長にも陳情し、ようやく既墾地の四分の一ほどの十町歩（約10 $\frac{1}{2}$ ）が貸付け許可となったのでした。

繁松は、その後も困難にあいながら、畑作だけでなく牧畜や商売（p179）もおこないます。

そして、明治32年（1899）に利別太に開かれた「洞寒外十三ヶ村戸長役場」の総代人（今の町議会議員）になり、さらに明治34年（1901）に北海道議会でできると、道会議員選挙に立候補して当選します。その後明治43年（1910）まで3期9年間にわたって北海道政に参画したのです。

（新津敏夫さんの話「池田町開拓夜話」より）

もう少し細かいこと

日清戦争直後の植民地解放

明治27年（1894）、日本と清（今の中国）は朝鮮に出兵し、「日清戦争」が始まりました。明治28年（1895）、戦いは日本の勝利となり、下関条約が結ばれました。

利別太（池田町）に住んでいた人たちは、軍資金を集めて1円くらいを出し、また、同じく利別太でシカ皮の商売をしていた三浦等六が明治27～28年（1894～95）に、合わせて2円を寄付しています。

十勝の植民地解放がおこなわれたのは、戦争翌年の明治29年（1896）でした。そしてその翌年、植民地の払い下げ面積が非常に大きくなりました。

その背景には、日清戦争後の産業発展において、大資本を持った人（資本家）たちの発言力が強くなり、北海道農業においても小規模な個人経営より、大土地所有による大規模経営の農場をつくり出していこうという機運の強さが、あったといえます。

「駅通所」に泊まって内陸へ

「駅通所」は、開拓者や旅人の宿泊所であり、また、人や馬の貸し出しをするところです。十勝では明治8年（1875）、大津（豊頃町）に初めて官設（公営）の駅通所ができました。ただ、そのころには茂寄（広尾町）や湧洞沼（豊頃町）にも旅舎があり、駅通所の働きをしていました。

明治25年（1892）から大津街道（p160）がつくり始められ、内陸にも駅通所が置かれていきます。

明治26年（1893）には、藻岩（豊頃町茂岩）と下帯広（帯広市）の駅通所が開業します。内陸へ向かう多くの開拓者が、休みを取っています。

さらに内陸の開拓が進み、道路整備がおこなわれるにしたがって駅通所は増えていき、大正15年（1926）には然別湖畔（鹿追町）にも駅通所が開かれています。

十勝の開拓者や商人にとって、駅通所は大きな役割を持っていたのです。昭和21年（1946）、駅通所制度は廃止されました。

2 1円（1えん）：日清戦争当時の手紙は2銭（0.02円）、明治25年（1892）の米（東京）が10kgで67銭（0.67円）、明治23年（1890）の石けん（東京）が12銭。（『値段の明治大正昭和風俗史 上』より）

3 資本（しほん）：事業（お金をもうけるための仕事）のもととなるお金。

どうして生まれた土地をはなれたの？

国際理解

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と川

用語

さくいん



明治なかばころには飛行機はなく、自動車もほとんどなく、鉄道さえも一部にしかありません。今とちがって、本州から北海道に来るのは大変なことでした。

例えば、明治30年(1897)に鳥取県から来た人たちは、4月10日ころに船で境港を出たあと、函館で船を乗りかえ、やっと4月22日ころ十勝近くに来ました。しかし、しけで7日間上陸できません。船よいがひどい一部の人

は広尾で上陸し、歩いて大津に向かいます。5月2日、大津で上陸した人たちと合流し、ようやく5月3日に洞寒村(池田町)の池田農場に着きました。開拓者にとって、北海道は今の外国よりも遠い場所で、二度と帰れないかも知れない「未開の地」だったのです。それなのに、なぜ生まれた土地をはなれたのでしょうか。それぞれにいろいろな事情や理由がありますが、大きな背景に「社会の変化」と「自然の災害」があります。

貧しい農民の増加

もともと、かつては長男が家を継ぎ、農家の次男、三男は行き場所に困っていました。自作農家にやとわれるか、手に入れた小さな土地で、米ではない商品作物を作り(加工して)、売るなどすることでかせいでいました。次男、三男は自分の農地、水田を持つのが夢でした。しかし明治時代に入ると、収穫ではなく土地の値段にあわせて現金で税をとられる「地租」が始まります。地主であっても地租がはらえず、土地を失う人が出ました。土地を持てるようになるどころか、土地を持たない貧しい農民がさらに増えてきたのです。

輸入や経済発展による農家の打撃

江戸時代末期から明治にかけて、日本に不利な条約の下、貿易が活発になります。一方、明治政府は経済を発展させようとして近代産業を育てます。産業発展にともない、安く大量に手に入る原料が求められるようになります。

徳島県、香川県の藍生産や愛媛県の綿生産は、外国産(ヨーロッパの植民地産)におされ、大きな打撃を受けます。

また、政府は重要な輸出品である生糸を、工場生産することによって高い品質で大量につくり、世界の中での競争力をつけようと考えます。

小さな畑で桑を育て、養蚕をおこない、家内制手工業で生糸を生産していた人たちは、大きな製糸工場にかなわなくなりました。



明治時代の終わりの桑畑(芽室町美蔓)。桑はカイコのエサとする。出身地でおこなっていた養蚕を、十勝でおこなった入植者もいた。

(写真:『十勝国産写真帖(北海道庁、1911)』より)

1 しけ(時化): 風雨のため海が荒れること。
2 土地を失う(とちをうしなう): 地租をはらうために、現金を持っている商人(商業資本家)から借金をするが返すことができず、そのかた(借金を返せない時、代わりに

わたすもの)として土地を取られる。結果として商業資本家が地主となっていた。
3 藍(あい): 草の名前で、この葉によって青く布を染めることができる。
4 生糸(きいと): カイコのマコからとれる糸。絹糸(きぬいと・けんし)の原料。

大地震、そして九頭竜川や長良川の大洪水

明治24年(1891)、岐阜県・愛知県を中心に大地震が起き、死者7千人以上という被害をもたらしました。

加えて、明治22、28、29年(1889、95、96)には、九頭竜川が洪水を起こして福井県の農地(とくに小さな桑畑)を飲みこみ、明治26、29年(1893、96)には、長良川が岐阜県の農地を飲みこみ、鳥取県でも水害が起きました。

明治30年(1897)には、全国的に凶作となります。社会の変化に追いつめられた上に、こうした自然災害によって痛めつけられた人々が、何とか立ち上がるうとしたところに「十勝移住」の話があったのです。



第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展そして未来へ

用語

さくいん



「興復社」のリーダー、二宮尊親の名前がついた豊頃町二宮。写真は尊親。(国土地理院刊行の1/5万地形図「糠内」を使用)

それぞれの理由

困っていた人たちはばかりではありません。明治29年(1896)今の豊頃町二宮に入地した、福島県の「興復社」の人たちは、貧しくなかったにもかかわらず、リーダーの二宮尊親をしたっていっしょに来たといえます。また、同じ年、池田農場(池田町)に入地した福井県移民団のメンバー、高橋甚吉・ゆう一家は、故郷では「小農ではあったが結構な暮らしをして」いました(高橋ゆうさんの話『池田町開拓夜話』より)。彼らは、「がんばった分、自分の土地が増やせる」と希望を持って来たのです(下のコラム)。そのほか「ひとつうけしよう」という考えの人もいました。

開いても自分の土地にはならなかった... 池田農場の「開き分け」

明治29年(1896)利別太と下利別原野(池田町)が旧鳥取藩主である池田仲博侯爵(と池田源子爵の組合)に払い下げられて、「池田農場」となります。管理人として久島重義がやって来ました(池田自身はやって来ない)。池田農場では、未開地を7年間農民(小作人)に貸して開かせ(1戸あたり約3畝)、2年目から小作料(大豆による現物)を取る、という小作制度で開墾をします。この小作人を募集する時、「移住にかかる船、宿泊、食事などの旅費は、すべて農場が出す。また、開墾して農地づくりに成功したら、その60%は小作人の土地になって自作農になれる『開き分け』である」と話しました。しかし、「農場では開墾できると、また新しい土地を開

けとって、せつかく開いた土地を取り上げ」ました。小作人たちは、いわばふるさとを脱出して来たのですから、裕福ではありません。小屋づくりのためのお金や開墾を始めるためのお金を、農場に借りるようになります。しかし「開き分け」には、「『開墾料』をもらわないこと」という条件があったのです。農場側がだましたのか、小作人側がきちんと確かめなかったのか、自作農の夢はなかなかかないませんでした。管理人の久島は、自作農創設を池田家に申し出ますが、池田仲博は同意しません。昭和9年(1936)、久島は亡くなる時、「小作人に申し訳ない」ともらしたといえます。(『池田町開拓夜話』より)(農地解放 p185)

5 二宮尊親(にのみやそんしん:1855~1922):祖父は江戸時代後期に「報徳思想(ほうとくしそう)」をとなえて、農村復興政策(ふつこうせいさく)を指導した農政家・思想家である二宮尊徳(にのみやそんとく:金治郎=きんじろう)。

6 池田仲博(いけだなかひろ:1877~1948):15代將軍徳川慶喜(とくがわよしのぶ)の五男で、明治23年(1890)鳥取藩主(とっとりはんしゅ)だった池田輝知(いけだてるとも)のあとつぎとなる。1 しけ(時化):風雨のため海が荒れること。

団体をつくって開拓する

地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

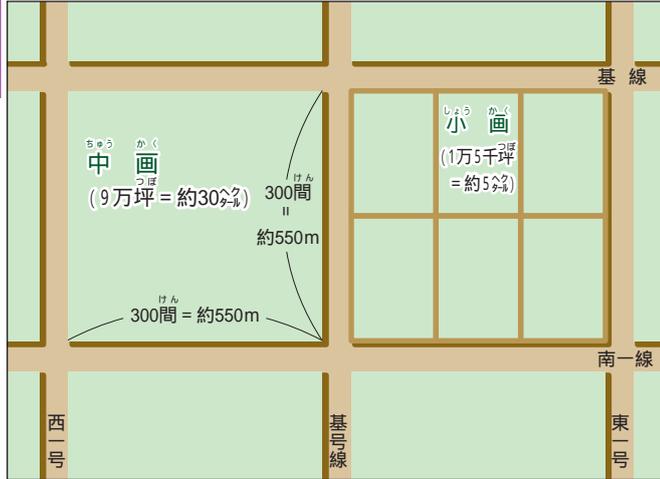
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



殖民地区画の方法。東西の基線と南北の基号線をもとにして、300間(約550m)ごとに「中画」とし、それを6つに分けた約5分の1の「小画」とした。
(参考:『池田町史』)

個人で開拓した人もたくさんいます。しかし、多くの開拓者たちは、団体をつくるか大農場に小作人として入って十勝に移住しました。

明治25年(1892)には、30戸(家族)以上の団体の移住したら1戸あたりおよそ5分の1の小画が借りられる、と決まりました。1団体の150畝くらいになります。

5年目に役所の検査があり、3.8畝まで農地になっていたなら「成功」で、農家は5畝を手にできました。

また、明治30年(1897)には、農耕のための土地は約500畝まで、牧場地は約760畝まで、森林なら約1,000畝まで払い下げる、という法律ができます。これにより、元手(資金)を持ち、人を集めることができる農場の入植が進み、十勝各地に大農場ができました。



下利別(池田町)に入植した「福井団体(リーダー・青山奥左衛門)の人が住んでいた草小屋。(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)

進む団体入植

団体入植は、土地が開拓者に貸しつけられるようになる明治29年(1896)より前から始まります(無願開墾 p163)。

明治25年(1892)には、香川県の団体が止若(幕別町本町)に、徳島県の団体が咄別(幕別町相川)に、また、徳島県人の板東農場が蓋派(池田町大森)に移住しています。

明治29年(1896)に殖民地の貸しつけが始まると、入植する団体がとても増えます。(p154 左下)

明治29年(1896)福井団体が下利別(池田町)に、また、明治30年(1897)には、岐阜県の武儀団体や富山県の矢部団体が音更町へ、さらに明治31年(1898)には、富山県の五位(伍位)団体が幕別町へ、愛知県の尾張団体が紋別川下流域(大樹町)へと入地するなど、各地に団体入植が進みます。

大農場と小作人

大農場は小作人を集めて開拓させます。

明治29年(1896)に始まった池田農場や高島農場(池田町)は、福井県、鳥取県、石川県、富山県などから移民団体を募集して小作人となりました。(p164・p165)

明治30~31年(1897~98)には、函館農場が本別原野(本別町)と足寄太原野(足寄町)に、美濃開墾合資会社が中士幌(士幌町)と毛根(芽室町)に、農場を開いて小作人を集めました。このようにして各地に大農場ができていきました。

明治30年(1897)ウシシュベツ原野(豊頃町)に入った福島県の興復社は、小作人を自作農とすることが大きな目的で、団体入植に近いものだったといえます(p165)。



「美濃の家」。美濃開拓合資会社農場が開いた中士幌(士幌町)に移設された復元家屋。美濃とは、岐阜県の昔の国名。

1 小作人(こさくにん):小作人は、地主から土地を借りて耕し、土地に割り当てられた小作料を払う。その立場は農場によってさまざまで、契約がただの口約束で守られない場合、凶作で日々の食料に困っても、月に3日分の食料しか貸してもらえず、人とし

てあつかわれない場合、きびしく働かされるが、それなりに「ほうび」がもらえる場合、学習会があり、団体として自作農をめざす場合、博愛主義の経営のもとで小作人が甘えて成功者が少ない場合、アイヌ地主に対してひどく安い小作料で借りる場合などがある。

地名についての開拓 ... 団体の名前やリーダーの名前が地名に

十勝の地名の多くはアイヌ語からきていますが、入植した団体や農場の名前や出身地名、あるいはリーダーの名前が地名としてつくこともよくあります。

池田町という名前は、池田農場からつけられています。十勝の市町村名のうち、ただ一つ、アイヌ語との関係がない名前です（ p 127 ）。

岐阜県の武儀団体や富山県の矢部団体が入植したところは武儀と矢部（音更町）になり、富山県の五位団体（五位団体）が入植したところは、五位（幕別町）となりました。

また、福井団体（リーダー：青山奥左衛門）が入植したところは青山（池田町）と名づけられ、福島県の興復社（リーダー：二宮尊親）が入ったところは二宮（豊頃町）と名づけられています（ p 165 ）。

少し変わったところでは、帯広市の幸福があります。ここは、もともとアイヌ語のサツナイからきた幸震という地名だったのですが、福井県からの移民が入ったところであったことから、「福」の字を合わせて「幸福」とされたのです。（ 巻頭マップ p 5 ）



(上)「矢部」という地名と、
(左)「武儀」という地名。
どちらも音更町。



五位団体が入植した
五位（幕別町）。

地図は国土地理院刊行の1/5万地形図「中士幌・帯広・糠内」を使用

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん

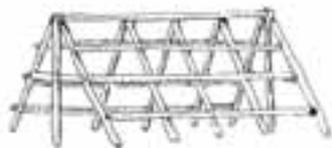
もう少し細かいこと

最初の家はそまつな小屋

開拓地に入ったら、家族で住むための家が必要です。明治29年（1876）刊のガイドブック「北海道移民必携」によると、「3・4月のころは雪が消えていないので、手近な木材を切って三角形に組み合わせて、むしろで囲って風や雪をしのぐ。

だんだんと雪が消えたら、かれ草を刈り、木を切りたおして小屋の四すみに丸木をうめ立てる。周りや天井に細い木をちようどよく取りつけて、ササやカヤなどの草で屋根をふき、周りを囲う（意識）」とあります。

入口はむしろを下げただけ。雨が降れば雨が、月夜には月の光がもれる。冬の夜には風がふきこむのでふんにもぐりこんでねると、そのふんの上にはふきこんだ雪が積もる、という大変きびしい暮らしも多かったのです。



入植時の仮小屋（おがみ小屋・三角小屋）。
(イラスト：池田町史より)

「1戸」となるために結婚する

団体入植の時、土地は「1人」にはなく、「1戸」に貸されました。「戸」とは家族です。独身では数に入らないのです。

そのため、若い入植者は故郷をはなれる直前に結婚することがありました。花嫁たちは、親元をはなれると同時に故郷をはなれ、全くどんなところかわからない、はるかにはなれた、帰れないかもしれない所に行くことになったのです。

結婚は、家族として「生きていくこと」であったのです。

団体のきびしい規則

団体入植の場合、大農場とちがいで、小作人であっても自作農に近くなります。一見いいようですが、これはうまくいかなかった、守ってくれる「親分」がないということです。

そのため、団体の一人ひとりが自立に向けて、努力をおしまずしっかり協力しなければなりません。

そこで、「団体規約」がつけられました。

「バクチ、祭以外での酒、見栄をはった結婚式や葬式、ケンカ、などをきびしく禁じる」「不正があった場合には組合（団体）をやめさせ、交際をやめる」など、きびしいものでした。

しかし、ただきびしいだけでは人がついてきません。同時に、リーダーの人望が厚いことも大切でした。

2 団体入植（だんたいにゆうしょく）：十勝での始まりは、明治16年（1883）の晩成社入植といえるが、明治4年（1871）静岡藩が一時的に6戸くらいを移住させている。
3 武儀団体（むぎだんたい）：岐阜県武儀郡中有知（なかうち）村の団体。美濃市生棚。

4 矢部団体（やべだんたい）：富山県西砺波（にしとなみ）郡山王村大字矢部の団体。高岡市福岡町矢部。
5 五位団体（ごいだんたい）：富山県西砺波郡西五位村の団体。高岡市福岡町五位。

生きるための学校、学校の中の生活

地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



とよこらちょうりつおつしょうがっこう
豊頃町立大津小学校。十勝で最も長い歴史をもつ小学校の一つ。

明治12年(1879)、^{ひろ お おおつ きょういくじょ}広尾と大津に教育所ができ、明治14年(1881)に公立の学校となります(のちの^{ひろ おしょうがっこう}広尾小学校と大津小学校)。

明治16年(1873)、オベリベリ(帯広)に入植した^{せいしや わたなべ ばんせいしや}晩成社の渡辺カネが、^{おびひろ にゅうしよく ばん}晩成社メンバーの子どもやアイヌの子どもを集めて、塾を開いています。

また明治27年(1894)には、寺に子どもを集めて読み書きなどを教える「^{てら こや}寺子屋」が、^{おびひろ しが としべつぶと いけ}帯広市街や利別太(池田町)につくられます。キリスト教の^{せんきょうし}宣教師による塾や学校もありました。(p198)

明治29年(1896)には、^{おしらべつしょう ちゅうがっこう ひろ}のちの音調津小・中学校(広尾町：平成19年閉校)、今の^{おちよう へいこう おびひろしょうがっこう}帯広小学校ができ、明治30年代になって十勝各地に学校が増えています。



明治31年(1898)、^{のむらじきょう いけだ}野村慈教が池田につくった^{せつきょうじょ てらこや}説教所。寺子屋として、池田農場の子どもにも授業をおこなった。

(写真：『池田町懐かしのアルバム』より)

教える側の目的、教わる側の理由

教える側(とくに国)としては、各地方から来た和^わ人、別の文化を持ったアイヌの人に、同じことばや文字を教えることで仕事を伝えやすくして、^{はってん}産業の発展につなげる目的があり、さらに兵隊になった時に命令しやすくする目的もあります。

また、^{ぶつぎょう}仏教やキリスト教などの^{そう せんきょうし}僧や宣教師が教育をおこなう場合は、^{しゅうきょう}宗教の考え方を広めることも大きな目的です。

教わる方はもっと切実です。文字や計算がわからないことで、^{こさく けいやく}小作の契約をする時やお金を借りる時に、かんちがいしたり、だまされたりすることがよく起きたのです。

こうした苦しみを子どもたちには味あわせたくない、そんな思いが、子どもたちに教育を受けさせようという力になりました。

いそがしい時には仕事が優先

ただ、多くの子どもたちは、学校に通う年になれば、大切な働き手でもありました。

農作物の取り入れなどいそがしい時には、学校は休んで家の仕事をするのがあたりまえでした。貧しくて学校へ通えず、^{さいさい ひとで ぶそく}8歳か9歳で、人手不足の家へ働きに出されることもありました。

また、赤ちゃんや小さい子は、お兄さんやお姉さんがめんどろを見なければなりません。

児童生徒が小さな子をおぶったまま学校で授業を受け、赤ちゃんが泣き出すと、ろうかに出てあやしていることもよくありました。そんな時には、窓から^{じゅぎょう}授業を聞いたものだといいます。



(上)明治41年(1908)に完成した^{とおふつじんじょうしょうがっこう}十弗尋常小学校。

(右)家の仕事などで学校を休む子どもの親に、学校へ来させるよう伝えた記録。



(写真：『池田町懐かしのアルバム』より)

1 宗教を広める(しゅうきょうをひろめる)：「神仏分離」など明治政府の国家神道推進をきっかけとした迫害も、他の宗教が北海道で布教することへとつながったという。

土間にむしろをしいて ... 寺子屋のようす

小林マサオさん〔女性〕の寺子屋についての思い出です。
 「(小林さんの通った)この寺子屋は全くの草小屋で、池田農場にまねかれて明治三十一年(1898)に入地した野村慈教さんが、布教のかたわら始めたものです(真宗大谷派本願寺所属説教所の池田仮設学校で今の池田小学校のもとになった:左ページ写真)。

中は地面にヨシをしき、その上にむしろをしいただけのものでした。

座布団もなく、冬は寺子屋の中に火をたいて勉強してい

ました。寒くてかじかむ手をこすりながらの勉強でした。寺子屋での勉強は「ハト・マメ」の読本と手習いで、石板に書いては消し、書いては消して勉強しました。

先生の野村慈教という人はとてもきびしい人で、質問にまちがった返事をする、女の子でもほほを強くたたかれたり、つねられたりもしました。学校の先生はかわいいものだと思つづく思つたものです。

冬の吹雪の日は寺子屋に通うのがつらくて、死ぬんでないかと思つたこともありました。」

(「池田町開拓夜話」より)

注:小林さんは165ページの高橋ゆうさんの娘

こおって足が入らないくつ ... 登下校も大変だった

「道路は馬車のわだちと馬の歩く道以外は草がのび、朝つゆにすそをぬらし、雨の日は泥にまみれての登校でした。

大雪の朝は馬そりで送ってもらい、下校の時は上級生が雪をふんで先頭を歩き、その足あとを下級生が歩いたものです」(堀井忠治さんの話)

「私は当時二年生で一学期まで先輩や姉に連れられて、開拓地の悪路往復十二kmを清見ヶ丘の池田小学校にかよったが、冬の吹雪や深い雪道は馬そりで送り迎えしてもらった。

今のようにゴム長ぐつもなく、防寒ぐつと称するズック(綿布製)のくつで、こおって固くなり足が入らない時、

姉にはかされて帰ってきたことがある。

様舞分教場の開校により通学は楽になり、雪の日は祖父が作ったわらぐつをはいた。わらは年に一、二度買う米俵をほどいて使った」(奥田実太郎さんの話)

「一日の授業が終わると二つの山を登って、我が家へと帰りました。一寸先も見えない原始林、大木の立木、昼でさえキツネやウサギがわが物顔に出て歩いていた時代でした」

(平井トメさんの話)

(東台小学校開校記念誌『東台の灯は消えず』・

様舞小学校開校記念誌『鑽仰』=「池田町開拓夜話」より)

十勝へ来る先生も大変だった ... 狩勝峠を馬そりでこえた

佐々木円太さんは、明治40年(1907)に利別尋常高等小学校の先生となりました。

師範学校(先生になる学校)は札幌にありました。佐々木さんは3月30日に列車に乗り、旭川経由で落合(南富良野町)までやってきます。当時はここで、線路が終わって

いました。一泊したあと、佐々木さんは仲間3人で馬そりをたのみ、狩勝峠をこえます。峠はまだ雪が深く、下り坂でそりがひっくり返り、20mくらい雪まみれになって転がりました。

ようやくふもとの新得に着いたら、今度は雪どけ道です。馬そりは苦労しながらペケレベツ駅(清水町)まで着き、ここで一泊しました。

ここから先は、もう馬そりが通れないということで、3

人は歩くことになります。

4月1日、泥にひざまでうまるような悪い道を、カシワの大樹林の中、とぼとぼと歩き続け、やっと夕方に芽室駅へ到着しました。家が14~15軒あって、ようやくホツとしたといえます。

翌日、帯広に行き、河西支庁(今の十勝支庁)であいさつをして注意を受け、一泊します。そして、翌4月3日、汽車に乗って利別に到着しました。

(注:鉄道は明治38年〔1905〕に釧路・帯広間が開通、帯広・落合間は明治40年〔1907〕9月に開通: p184)

(佐々木円太さんの話を意識)

(『利別尋常小学校開校六十周年記念誌』

=「池田町開拓夜話」より)

2 むしろ(籬): わらなどを編んで作った敷物。
 3 手習い(てならい): 文字を書く練習。読み書きや勉強のことをいう場合もある。

4 石板・石盤(せきばん): 黒い石でできた板で、ろう石というチョークのような道具で文字を書くノートの一種。布でふけば消えるので何度も使えるが、記録はむずかしい。
 5 わだち(轍): 車輪のふみあと。

2. 進む開拓と川

今とはちがう明治時代の「十勝川」

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

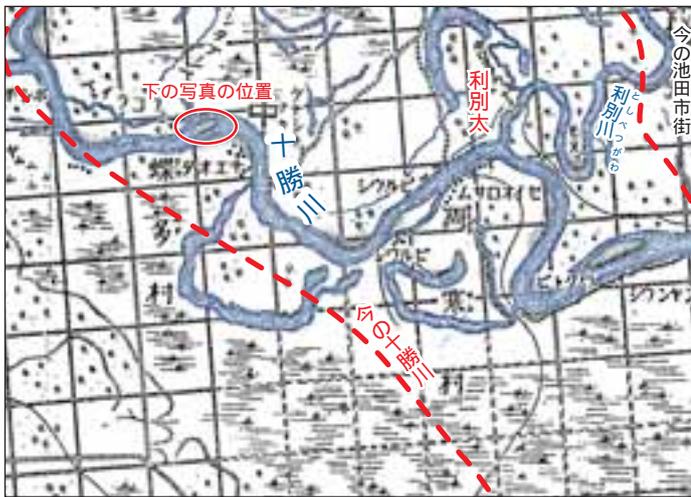
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と未来へ

用語

さくいん



明治29年(1896)発行の地形図(80%に縮小。川・沼に着色)による十勝川。今の千代田から利別(池田町)あたり。赤い点線は今の十勝川と利別川。



(上)最近の地形図(70%に縮小)。上の明治の地図とほとんど同じ範囲。
(右)旧十勝川の沼。

明治時代の川はほとんど自然なままの流れで、今は大きく異なります。

今よりずっと曲がりくねり、何本にも枝分かれして流れていました。大きな洪水があると、本流の場所が変わることもありました。

流れはあまり変わっていなくても、今とは名前がちがっていたり、同じ名前の川でも今とは全く別の場所を流れていたりすることがあります。

洪水から暮らしを守るために、また、畑や住宅に使える土地をふやすために、流れをよくしたり、堤防をつくったりすることで、人が今の川の形にしてきたのです。

ずっと池田市街に近かった十勝川

今の十勝川のうち、千代田大橋(幕別町・池田町)から茂岩橋(豊頃町)までの間は、人がつくった「新水路」です。

(p190)

ももとの十勝川は、千代田大橋のあるところから左(東)にカーブしていました。そして今のオシタツ川を通り、旧利別川から礼文内川を通して茂岩に流れていたのです。

また、利別川も今の池田大橋(池田町)より上流で右(西)に大きく曲がって、今の利別南町のあたりで十勝川(今のオシタツ川)に流れこんでいました。そのため、この場所を「利別太(トシベツプト: アイヌ語でトウシベツプツ: 利別川の河口の意味)」と呼んでいました。

浦幌に流れている方が「十勝川」だった

昭和の中ごろまで、十勝川は旅来(豊頃町)や愛牛(浦幌町)の下流で、今の十勝川と浦幌十勝川に分かれていました。(p208)

このころは、今の浦幌十勝川の方が、十勝川と呼ばれていました。つまり十勝川の河口は、浦幌町の十勝太(トカチプト: アイヌ語で十勝川河口の意味)にあったのです。

そして、大津(豊頃町)に流れている今の十勝川下流は、かつては「大津川(オホツナイ: アイヌ語で深い枝川の意味)」と呼ばれていました。枝川とは分かれた川という意味で、十勝川から分かれた川、ということでしょう。



昭和29年(1896)発行の地形図(40%に縮小・着色)。生剛村(2: 浦幌町)へ向かう川が「十勝川」で、今の十勝川下流部は「大津川」とある。

(このページの地図は、国土地理院刊行・所蔵の1/5万地形図を使用)

1 分かれた川(わかれたかわ): 河川用語では、ある川に合流してくる川のことを支川(しせん)といい、分かれていく川のことを派川(はせん)という。

2 生剛: もとはアイヌ語地名の「オベッカウシ(山尻を川の岸につけているもの)」に当てられた字で、その後、「おべこはし(おべこわし)」、「おべっこうし」と読みが変わり、やがて「せいごう」と読まれるようになった。

かつての川の流を探る ... よく見ると残っていることも

十勝の川、とくに平野部の川は、そのほとんどに人の手が加わっています。明治時代以前の川のように、全くちがう場合が多いのです。

ただ、もとの流れが全くなっているかといえ、そうではない場合もたくさんあります。

川合大橋（池田町）近くから茂岩（豊頃町）へ流れる「旧利別川～礼文内川」は、かつての十勝川のなごりをなんとか残しています。

また、十勝川支流のメン川（幕別町）は、かつては十勝川の流れであったことや札内川の本流だったことがあります。このように、本流ではなくなったあとも、小川として残る場合があります。

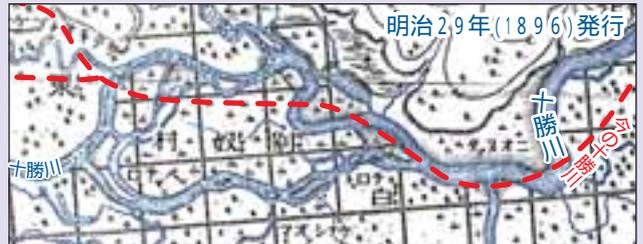
あるいは、今は水が流れていなくなっても、よく見ると地面のくぼみがしばらく続いていることがあります。こうしたところは、川や水路が整備される前の流れのあとかも知れません。

今、家が建っているところでも、かつて川だったところは多いのです。以前に流れがあった場所には、伏流水といって地下を流れる「川」があることもあります。

昔の地図と今の地形をたよりに、身近なところで川のあとを探してみませんか？（古い地形図 p189）



メン川（幕別町・千住11号橋）。かつてメン川は、十勝川の分かれた流れや札内川の本流であった。



昔と最近の、同じ十勝川温泉近くの地形図。明治29年ころには、今のメン川の位置を十勝川（分かれた流れの一つ）が流れている。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

もう少し細かいこと

市町村の境界からわかるかつての流れ

市町村や地方を分ける時（大陸で国を分ける時にも）、川の流れや山（丘）の尾根を境界とすることがよくあります。人の行き来をジャマすることから、区域を分けるきっかけとなるからです。（それ以外の分け方もあります）

ところが、ほとんど川の片側にある市町村なのに、時々、一部が川を飛びこえた場所にあることがあります。

地図で見ると、境界線がその場所だけ川とずれているのです。これは、境界線を決めた時に川が流れていた場所かも知れません。

例えば、幕別町の大部分は十勝川の南側（右岸）にあるのですが、対岸にある道立十勝エコロジーパークにも入っています。

古い地図を見てみると、エコロジーパークにある境界線のところを、かつては十勝川が流れていたことがわかります。この流れに合わせて境界を決めたあと、十勝川の流れが変化して今の流れになりました。

このように、地図上にある市町村の境界は、かつての川の流れを教えてくれることがあるのです。



道立十勝エコロジーパーク近くの地形図。平成12年（2000）発行。エコロジーパーク（□）内に町境界（---）がある。

左と同じ範囲の明治29年（1896）発行の地形図。上の図の境界線のところには、当時の十勝川が流れている。

（このページの地図は、国土地理院刊行・所蔵の1/5万地形図を使用）

3 右岸（うがん）：川の下流に向かって右側を右岸、左側を左岸（さがん）という。

開拓者の暮らしと川

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や
川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



げんしりん かいたく にゅうしょくしゃ しんとくちょうにいらい
原始林を切り開いて開拓する入植者たち(新得町新内: 明治時代の終わりころ)。(写真: 『十勝川写真で綴る変遷』より)

はじめのころ、開拓者たちの多くは川ぞいの開拓地に入りました。

川ぞいは土が肥えていること、高台に比べれば木が固くなく少なくて切り開きやすいこと、などが理由でした。

しかし、川ぞいの土地にも、今あるものよりずっと太い、ヤチダモ、クルミ、ドロノキといった木々が生いっけています。中には、直径2mくらいのものもあったといひます。

木があまり無いところは湿地帯で、背の高さの倍もあるカヤやヨシなどが、ビッシリと生えていました。カヤの根がからんだ大きな固まり(谷地坊主)もあります。

クワ、ノコギリ、おのなどのかんたんな道具で切り開くのは、大変なことでした。

川のほとりで小屋づくり

開拓地に入った人たちは、まず、川ぞい(や沼のほとり)の草地に、ヨシやカヤをかり取って、かんたんな小屋を建てました。毎日の生活には飲み水など生活用水が必要であり、ものを運ぶには川舟を使うためです。(最初の家 p167)

生活用水をとる川の水は、雨が降るとにごって使えなくなる場合もあります。山際にわく湿地の水をくんで使うこともありましたが、くさみがあり、遠くから運ぶのは大変だったといひます。

近くの人たちと力を合わせて井戸をほり、そのそばに共同の風呂を建てたところもありました。



にゅうしょくしゃ ていど
入植者たちは、ある程度落ちつくと、自分たちの手で小屋を建てた。(幕別町ふるさと館展示: 1)

川に痛めつけられる

川の近くの土が肥えているのは、川が運んできた上流の土と栄養分が「洪水の時に」たまるためです(氾濫原 p46)。作物はよく育っても、洪水になれば水につかる場所でした。洪水のたびに、開拓者たちは痛めつけられました。(洪水 p186)

洪水のために、せつかく開いた土地をあきらめ、高台に移り住む人もたくさんいました。

また、橋ができるまでは、かんたんには川をわたれません。舟を利用するか、浅いところを探さなければなりません。学校ができた時、川の対岸に住む生徒のために渡船場(p176) がつくられたこともあります。



こうずい かいたくち たかしまのうじょう いけだちょう
洪水によって水につかる開拓地。明治44年(1911)、高島農場(池田町)。(池田町懐かしのアルバムより)

1 幕別町ふるさと館(まくべつちょうふるさとかん): 幕別町依田 384-3(依田公園横)
電話 0155-56-3117 月・火曜日休館

川に助けられる

なかなか開拓が進まず、あるいは凶作などで作物がとれないような時でも、川の魚によって飢えから救われ、お金を手に入れることができました。

ウグイなどの小魚はたくさんいます。上流～中流では、ヤマメ（ヤマベ）がたくさんとれました。

中流～下流部では、海から産卵のためにのぼってくるシシャモで、十勝川が真っ黒になるほどだったといわれています。

川をさかのぼったサケやマスをとるのは、禁止されていたのですが、実際には多くの人にとっていたようです（p146・サケの人工ふ化 p174）。

魚は、始めのうち、アイヌの人と物々交かんで手に入れ、やがて釣りやワナ、網などでつかまえるようになりました。



(上) 冬をこすために、川をのぼるウグイの群れ（下頃辺川・浦幌町）。



(右) 産卵するために川をのぼるシシャモのオスは黒くなる。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

米作りと川

開拓者たちが米のごはんを食べることができるのは、正月（とお盆）くらいしかありませんでした。イナキビや麦、ソバなどが毎日の主食だったのです（季節によってはジャガイモやトウモロコシなどもありました）。

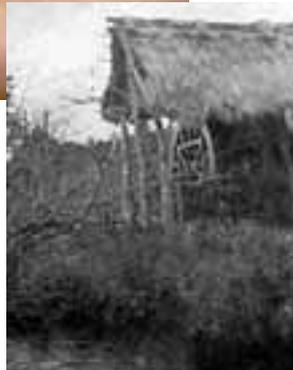
開拓者たちにとって、ふるさとで食べていた米のごはん、そして米作りは大きな夢でした。

水田には水があるので川から引きます。ただ、水温が低いと、なかなかうまくいきません。失敗しながら、ため池をつくるなどの工夫によって、少しずつできるようになりました。

川の水で水車を回し、その力で精米したところもありました。



(上) キビ（もちきび）。栄養は豊富で、今でも米に混ぜてたかれる。



(右) 福井団体のリーダー青山奥左衛門は明治31年(1898)、米作りに成功した。写真は、精米のための水車小屋(十日川:池田町)

(下写真:「池田町懐かしのアルバム」より)

朝夕の魚とり ... 遊びでもあり仕事でもあった

大正5年(1916)に、様舞尋常小学校(池田町・のちの様舞小学校)を卒業した、奥田実太郎さんのお話です。

「休み時間には狭い廊下や教室で、女子は袋の中に小豆を入れて作ったお手玉つき、男子は竹割りやパッチをし、外では金輪の独楽で遊んだ。

冬は自家製の手籠で学校の坂や、部落会館の裏の植樹地が畑であったのでそこで滑った。

春は桜やコブシの花見、山ではリリー(スズラン)狩り、ワラビ、フキ、ウドの山菜を取ったり、秋はブドウ、コクワやマイタケを取りに行った。

利別川には朝夕、ハエナワをかけ、アカハラ、カチカ、イトウを釣り、四線の小川ではタモで雑魚を掬った。

ハエナワの餌は四線の小川でドジョウや八つ目ウナギを取り、畑の古切株の根を掘ってカブト虫の幼虫を取った。それが放課後の一つの仕事でもあった。

北二線の沼にはよくフナ釣りにいったものである。利別川に泳ぎに行くことは祖母がやかましく禁じていたので行かなかった、それで今も泳げない」

(「様舞小学校開校記念誌『鑽仰』」より。一部改変)

(「池田町開拓夜話」)

2 ハエナワ(延縄): 長いロープにたくさんの釣り針をたらしめて魚をとる方法。

サケの人工ふ化

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と、そして未来へ

用語

さくいん



明治の終わりころのサケ漁。当時の十勝川(今の浦幌十勝川)河口近くの十勝太(浦幌町)で。(写真:『十勝国産業写真帖(北海道庁、1911)』より)

明治12年(1879)に十勝組合が解散すると、十勝の漁場に多くの漁師が入ります。漁業は発展し、魚も多くとれるのですが、サケの数は減ってきていました。

サケは北太平洋で育ち、生まれた川に帰って産卵します。漁では、その帰ってきたサケをとるため産卵するサケが減り、生まれるサケも減ってしまったのです。

明治16年(1883)、川の中流以上でのサケ漁が厳しく禁じられましたが、これはアイヌの人たち(と移民)を苦しめたため、その後少しゆるめられました。(p146)

明治20年(1887)、漁民が集まり「十勝漁業組合」ができました。十勝漁業組合は、サケを増やそうとします。組合員は、とったサケの量によってお金を出し、密漁防止と「ふ化場」づくりをめざしました。



(上)明治終わりころのふ化場。(写真:『十勝国産業写真帖(北海道庁、1911)』より)

(右)ふ化場があったあたりの今のようす。帯広市東9南4~5。



ヌップク川や旧帯広川支流にできたふ化場

明治28年(1895)、十勝漁業組合はヌップク川(帯広市大正)に、小さいながらも「ふ化場」をつくりました。ふ化場は、サケの卵をとって人の手でかえし(ふ化させ)、サケの子どもを川に放して(放流して)サケを増やそうとするところです。(p236)

明治29年(1896)、とった卵の1/3くらいながらもサケを放流しましたが、次の年にカミナリが落ち、ふ化場は焼けてしまいます。しかし、漁業組合は補助金を受け、幹部が寄付金を出すことで、明治32年(1899)、帯広川(今の旧帯広川)支流のパラト川に「十勝鮭鱒孵化場(帯広ふ化場)」をつくりました。このふ化場は技術を高め、施設を増やし、明治40年(1907)ころには、北海道でも指おりのふ化場となりました。

工場廃水による卵と稚魚の全めつ

昭和4年(1929)、十勝鮭鱒孵化場で育てていたサケの卵と稚魚(子ども)が、全めつしました。

きれいなわき水を使っていたのになぜ、と調べてみると、工場が廃水を売買川に流し、そのよごれた水がしみこんで地下水となり、これがわき出したものとわかりました。わかるまでに2年かかりました。

ふ化場を運営していた「十勝外四郡 鮭鱒養殖組合」は、工場と2年間交渉し、補償が出ることになりました(この間は仮のふ化場を使う)。

昭和8年(1933)、新しくヌップク川(帯広市大正)に建てられた「十勝ふ化場」で、改めてサケのふ化がはじめられました。次の年、北海道のふ化事業は、北海道庁に受けつがれました。



(上)ふ化場があったヌップク川での観察会(ヌップク川をきれいにする会)。おくの「せき」が、ふ化場へ水を引くためのもの。

(右)昭和34年(1959)、ヌップク川ぞいに建てられた石碑。今ではここにふ化場はないが、「さけますセンター(3)」がある。



1 密漁(みつりょう): 法律や規則に従わないで魚などをとること。
2 稚魚(ちぎょ): すべてのヒレのズジの数が、成魚と同じになってから、ウロコでできあがるまでの間の魚。その前は仔魚(しぎょ)。サケは、仔魚の間は栄養のふくろを

つけていてエサをとらず、稚魚になってからエサを食べるようになる。
3 さけますセンター: 正確には「独立行政法人水産総合研究センター さけますセンター 帯広事業所」。帯広市大正町基線。

川は「幹線道路」... 川舟

地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

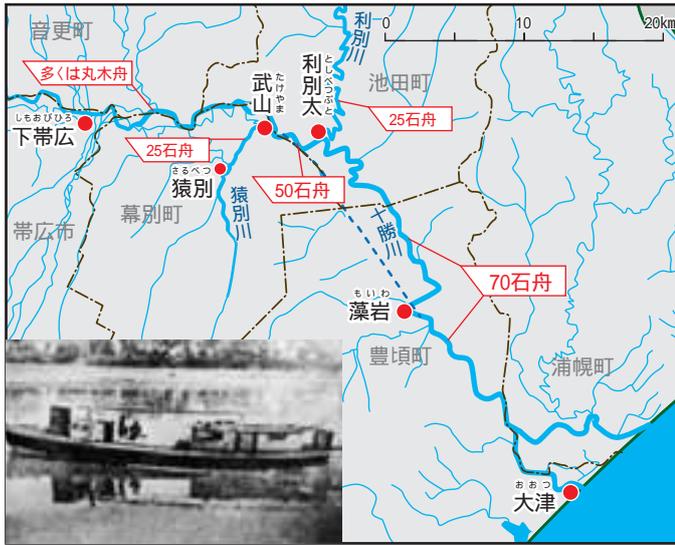
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



おもな舟着場。写真は五十石舟。---は新水路(今の十勝川)、---は今の市町村境界(市町名も今のもの)。(舟の写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

明治時代になっても、伝統的なアイヌ文化と同じように、おもな交通路は川でした。舟も、明治25年(1892)ころまでは丸木舟だけでした。(チップ p128)

明治26年(1893)、洞寒村(池田町)の三浦等六が木材や荷物の川舟運送をする資格をとり、利別太(池田町)～大津(豊頃町)間の運行を始めました。

その後、入植者が増え川舟運送は発展します。明治30年(1897)ころには丸木舟のほか、平底の二十五石舟・五十石舟・七十石舟が十勝川(下流は当時大津川)を行き来しました。

大津～利別太間では、舟の数が「上り百パイ、下り百パイ」だといわれるほどのにぎわいで、大津の河口には、いつも170艘ほどの川舟がひしめいていたともいいます。

発展した舟着き場の街... 利別太

十勝川のおもな舟着き場は、大津川(今の十勝川下流部)河口から、大津(豊頃町)、藻岩(豊頃町茂岩)、利別太(池田町)、武山(幕別町・猿別川合流点)、それに下帯広(帯広市・旧帯広川に入る)でした。

各舟着き場の街は発展しました。

中でも、利別太は、ここから上流へは七十石舟が行けないので荷物を積みかえなければならないこと、利別川との合流点であること、といった理由で大きな運送ターミナルとなり、とくに発展しました。

明治32年(1899)、利別太市街には役場や郵便局、駐在所などがあり、440戸、1,710人が住んでいました。

(名古屋商店写真:『池田町懐かしのアルバム』より)



(上)利別太舟着場のあったあたり。かつての十勝川(オシタップ川、大曲橋より:池田町)。



(右)利別太市街にあった名古屋商店。

武山・藻岩市街

武山(幕別町旭町)は明治23年(1890)、武山土平が利別太から移住した土地です。のちに、洪水被害者の住宅地をただで提供したことから、「武山市街」ができます。

この場所より上流へは、五十石舟がなかなか行けないため、重要な舟着き場となります。

明治31年(1898)、南四線道路(今の国道38号・相川～札内間)が開通し、この道路との接続場所ともなったことで、武山市街は発展しました。

また、藻岩(豊頃町茂岩)は大津街道(p160)ぞいにあり、ここの駅通所(p163)には、歩きの移住者も一泊していきました。



藻岩駅通所のあったところ。豊頃町茂岩本町の「ポケットパークもいわ」。手前の道(道道 旅来豊頃線)がかつての大津街道。

4 丸木舟(まるきぶね):大きな丸木舟なら、豆20俵(およそ1.2トン)を積めたという。
5 洞寒:アイヌ語地名「セイオロサム」にあてた漢字。のちに「しほさむ」と読まれる。
6 石(こく):石とは、容積の単位。船の積載量(せきさいりょう)を表すときには、1

石=10立方尺(約280リットル)とした。米で約230kg。70石の米で、約16トンになる。(一般的には1石=100升〔約180リットル〕、米で約150kg)下りの舟には240～250俵積んだという。1俵60kgとすると約15トン。

川をわたるための「渡船」

地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで



十勝川千代田渡船場(1:幕別町明野 - 池田町千代田)。後ろに見えるのが、千代田の鉄道橋。渡船は人だけではなく、馬や馬車、自動車も運んだ。(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)

橋がない時には、川は歩いてわたるか、舟を使ってわたります。川をわたるための舟を「渡船(渡し舟)」と

いいます。江戸時代、和人が海ぞいに十勝や道東を移動する時、何本か川をわたります。街道とともに渡船場が整備され、アイヌの人の丸木舟(p128)が利用されました。

明治に入り、内陸に和人が入りはじめたころも、丸木舟は活やくします。やがて人が増え、農業や商業がさかんになるにつれ、大きな船がつくられるようになりました。大正時代には、一度に人30人と馬車3台をいちどに運ぶことができる渡船も現れました。

十勝川をはじめ、十勝の川には渡船場がつくられ、渡船は多くの人々の足となって活やくしました。

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ



利別川の信取渡船(3:池田町)。ロープ(矢印)が張ってある。(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)

ロープと流れを利用して

はじめは、「ろ」や「かい」、それに「さお」だけで、川をわたっていました。

やがて、ワイヤーロープを川にわたし、それをたくるようになり、さらに、ワイヤーに舟を滑車でつなぐことで、大きな渡船でも川をわたしやすくなっていきました。

ただ、ロープがあっても力だけで引っぱるのではありません。川の流れに対して舟の向きをうまく調節することで、舟が対岸に向かうようにする技術が必要でした。

十勝川の越中渡し(帯広市東~音更町ひびき野)では、大きな渡船を二人であやつりました。一人が滑車を動かし、一人がさおをあつかい、おだやかに岸に着けたといえます。

最後の渡船... 旅来の国道渡船

舟はひっくり返ることがあり、人が亡くなることもありましたが、洪水になれば、わたることができなくなります。

明治38年(1905)、十勝川に開成橋(今の十勝大橋)ができるなど、大きな川にも少しずつ橋がかかり、渡船の役割は小さくなり、すがたを消していきました。(p182)

しかし、大きな川に橋をかけるには、大変なお金がかかります。渡船は、大正時代になっても活やくしました。

中には、熊牛本村渡船(清水町)のように、昭和23年(1948)から始まったものもあります。

最後に残ったのが、国道336号の一部でもあった「旅来渡船(豊頃町旅来 - 浦幌町愛牛)」でした。平成4年(1992)、十勝河口橋の完成とともに、その役目を終えました。



(上)旅来渡船。人と自転車、バイクまでをわたした。国道336号の一部で、平成4年まであった。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)



(右)旅来渡船記念の碑。豊頃町旅来、道道旅来豊頃線ぞい。

用語

さくいん

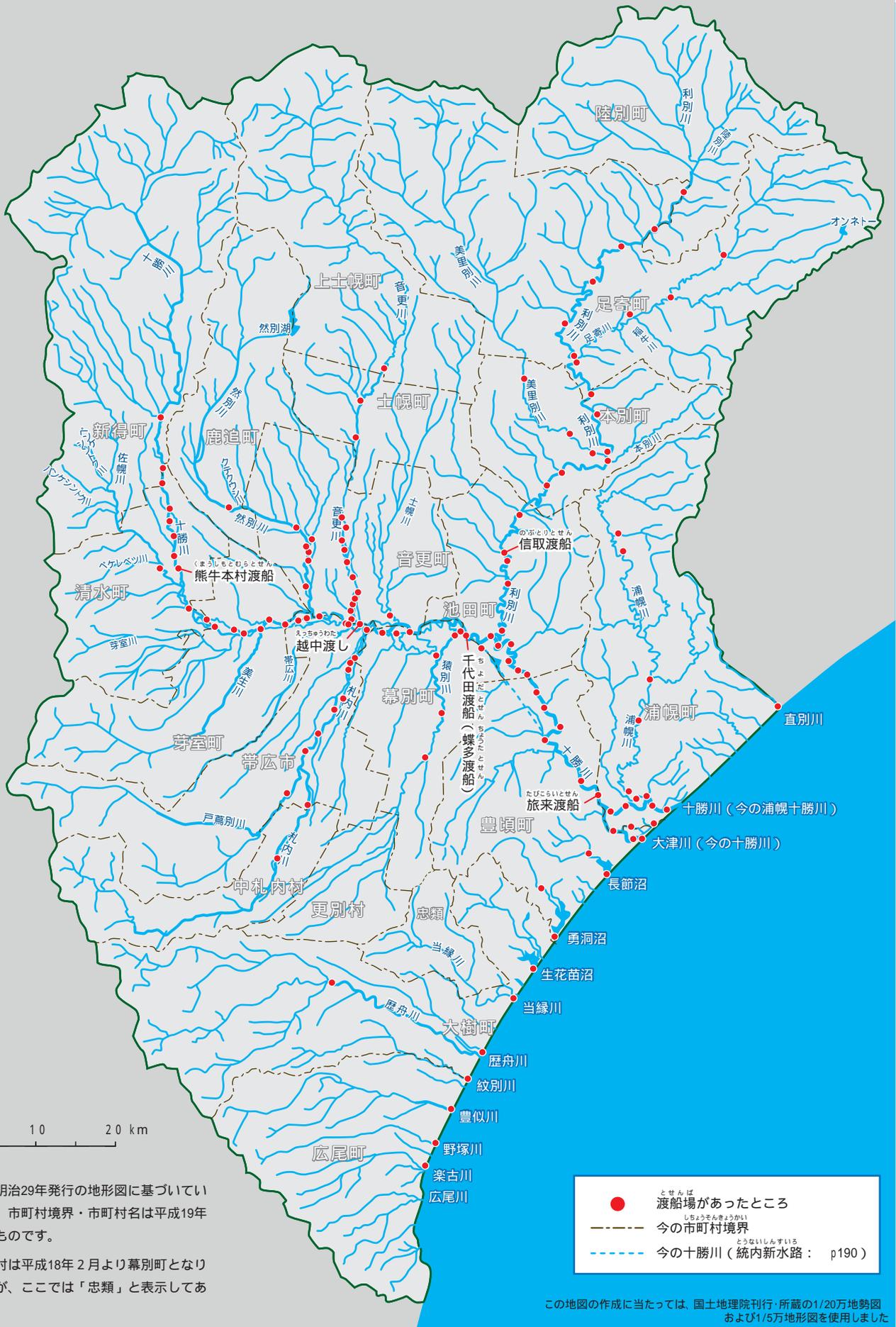
1 千代田渡船場(ちよだとせんじょう): 明治23年(1890)武山土平(p175)が私設武山渡船場をはじめ。明治32年(1899)官設蝶多十勝川渡船場(かんせつちようたとかちがわとせんじょう)に、大正2年(1913)官設千代田十勝川渡船場(かんせつ

ちよだとかちがわとせんじょう)になった。
2 越中渡し(えっちゅうわたし): 越中渡船場(えっちゅうとせんじょう)。明治から大正にかけては荷馬車も運べる大きな舟であり、橋がかかったあとは人だけの舟となって、

とせんば

十勝にあったおもな渡船場

参考:『澁標 十勝川の川舟文化史資料1・十勝の渡船場位置図』十勝川川舟文化史『澁標』編集委員会、十勝川川舟文化史『澁標』刊行会、2004



注: 川は明治29年発行の地形図に基づいていますが、市町村境界・市町村名は平成19年現在のものです。

注: 忠類村は平成18年2月より幕別町となりましたが、ここでは「忠類」と表示してあります。

- とせんば 渡船場があったところ
- 今の市町村境界
- 今の十勝川(統内新水路: p190)

この地図の作成に当たっては、国土地理院刊行・所蔵の1/20万地形図および1/5万地形図を使用しました

昭和27年(1952)まで運航した。

3 信取渡船(のぶとりとせん): 明治29年(1896)以前から渡船はあった。その後、明治30年(1897)に官設信取利別川渡船場(かんせつのぶとりとせん)とつがわとせんじ

よう)となり、明治43年(1910)まで運航された。

4 旅来渡船(たびこらいとせん): 明治31年(1898)設置された。浦幌側からは、愛牛タンネウタ渡船とも呼ばれた。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 そして未来へ

用語

さくいん

海の道と川の道 ... 船・舟の思い出

開拓と舟や船は、切っても切れない関係にあります。本州などから十勝へは、多くの人が函館経由で船に乗って来ています。

開拓して畑を開き、できた作物は川舟によって大津まで、そして海の船によってほかの地方へ送られました。生活道具や本州からの便りなど、ものや情報は川舟が運び上げてきました。

ここでは、「池田町開拓夜話」から、移住してきた時の思い出、そして、川舟に関する記録などを紹介します。(一部略。漢字やかなづかいは原文のまま)

新津とよじさんの話 大津を目の前にして

「私達が出発したのは明治二十九年(1896)二月十一日でした。

今では長野県佐久市とって大きな町になっているのですが、そのころはずっと南に下った南佐久郡小海村という片田舎の貧しい村でしたので、みんな移住のために出てゆくという有様でした。

主人の亀蔵は、一足先に利別太へ来ていました。フンベ山付近の開墾に当たっていた兄の繁松を頼り、先乗りしていたので、私達は指示された通り小海村を発って陸路を北上し、新潟港から船に乗ったわけです。

海のない信州(長野県)から突然日本海に出たものですから、その広く果てしもない海というのを見て、まずはびっくりしたものです。

途中、船は津軽海峡を抜けて函館に立ち寄り、ちょっと一息ついて大津へ向かおうと風待ちの帆をあげて出発したわけです。

あと何日かで主人のいる開拓地に着くのかと思うと、疲れもいっぺんに吹き飛んで、初めて北の国のトカチというところの感じが肌に伝わり、心は宙を飛び思いましたが、エリモ岬あたりで暴風雨に遭い、船は難航しました。

そして五日五晩波にもまれながら、ようやく目的地の大津を目の前にしたのですが、やはり波が高く荒れていましたので沖揚げができず、一日二日と風待ちをしたのですが、その間の長かったこと、今でも忘れることはできません。

結局上陸や荷揚げは不可能ということで、船は一旦函館へ引き返すことになりましたが、私達は気が気ではありませんでした。

まだ二十歳になったばかりの若妻だった私は、二歳の赤ん坊キクを抱えておまして、この船旅のどさくさで母乳も上がってしまい、言うに言われぬ苦勞をしたものです。

一応函館へ引き返した船は、風待ちということで全員が下船させられました」

新津とよじさんの話 大津上陸をあきらめ、釧路へ

「下船から二十日経って海も風た(ないだ)ということで再び函館を出港することができましたが、やはり大津の沖は波が高く、迎いの舳も接舷できず、またまた目的港の大津をあきらめて、今度は釧路へ向かうことにしました。

釧路なら港も発達しているということで、とにもかくにも一日も早く上陸するには贅沢など言っておれません。

船はまた沖へ出て釧路へ向かいました。

運が悪かったんですね。

私達の乗った船は東光丸とって、たしか百人乗りと聞きましたが、何トンの船であったかは覚えていませんが大きな船でした。

しかし釧路の海上もやっぱり波が高く、河口へ着く予定のものが変更になって、沖合で舳に乗り移ることになったわけです。

ふつうなら歩み板のようなものを渡すのですが、波の上下で船と船の差が大きく、到底歩み板など渡すわけにはゆかず、軽業師みたいに波の上下を見計らって水夫の掛け声に合わせて舳に飛び移るわけです。

凍りつく冷たい海水を頭からかぶって、死ぬか生きるかの瀬戸際での上陸で、まったく生きた心地ではありませんでした。

こんなことなら小海村にいて、貧乏でもいいから百姓をしていた方が、よっぽどよかったと何度も考えました。

でも苦勞の甲斐があつてみんなが無事に上陸できたことは、天にも昇る心地で、海の神様にも風の神様にも感謝し合いました」

(その後、とよじさんたちは三日半かけて大津まで歩きます。大津で夫である亀蔵さんと再会し、馬そりに乗って利別太に到着しました)(新津繁松 p163)

1 風(なぎ): 風がやみ、波がなくなり、海面がおだやかになったようす。

2 舳(はしけ): 本船と岸との間を往復して、人や荷物を運ぶ小舟。

3 石(こく): 石とは、容積の単位。船の積載量(せきさいりょう)を表すときには、1石=10立方尺(約280リットル)とした。米で約230kg。70石の米で、約16トンになる。(一般的には1石=100升(約180リットル)。米で約150kg)

程度^{ていど}の差^さはありましたが、多く^{おほく}の入植者^{にゅうしょくしゃ}が十勝へ来るだけでひどい苦勞^{くるわう}をしています。海^{うみ}での船^{ふね}よいよ陸^{りく}の悪路^{あくろ}のため、大変^{たいへん}な目にあい、その無理^{むり}がたたってお年寄^{としよ}りや小さな子ども^こが亡^なくなることもあったそうです。

アイヌの人^{にん}たちは、丸木舟^{まるきぶね}（チブ：128）をあやつって十勝川^{じゆつがわ}などの川^{がわ}を上^あ下^{くだ}し、人^{にん}やもの^{もの}を運^はび、あるいは魚^{いし}をとっていました。

川^{がわ}ぞいに入植^{にゅうしょく}した人^{にん}たちも、丸木舟^{まるきぶね}を持つ^もことが多く、同じ^{おな}ように川^{がわ}を交通路^{かうたうろ}として利用^{りよう}していました。大洪水^{だいこうずい}の時^{とき}には、この丸木舟^{まるきぶね}が避難^{ひなん}や救助^{きうす}に使^{つか}われて

います（ p187）。
一方^{ひと}で、大津^{おおつ}～利別太^{としべつ}を中心^{ちゆうしん}とした川舟運送^{がわふねうんそう}は発展^{はつてん}を見^みせませす。丸木舟^{まるきぶね}だけではなく、大きな二十五石舟^{にじゅうごこくぶね}・五十石舟^{ごじゅうこくぶね}・七十石舟^{ななじゅうこくぶね}が十勝川^{じゆつがわ}などを行^いきかうようになり^なりますが（ p175）、そこには舟^{ふね}で働^かく人^{にん}たち（川舟人夫^{がわふねにんぶ}・船頭^{せんとう}）の苦勞^{くるわう}がありました。

川舟^{がわふね}で働^かいた高橋桂次郎^{たかはしけいじろう}さんの思^{おも}い出^でを、息子^{むすこ}の喜智^{きち}さんが語^{かた}っています。

重労働^{かむふねにんぶ}の川舟人夫⁴

「父桂次郎^{ちちけいじろう}は、明治三十一年^{めいし}（1898）三月八日^{やま}、山形県高島町^{がたけんたかしまち}の郷里^{きやうり}を徒歩^こで出発^{わたらせ}して渡瀬^いで一泊^{いぱく}、宮城県白石^{みやぎけんしろし}駅^{えき}で乗車^{あおもり}して青森^{あおもり}へ向^{むか}った。青森一泊^{あおもりいぱく}、連絡船^{れんらくせん}で函館^{はこだて}へ、そして大津^{おおつ}行き^いの貨物運搬船^{かむものうんぱんせん}に乗船^{のりふね}して出港^{しゅつこう}した。

三月十五日^{さんがつにじゅうごくにち}に大津港^{おおつこう}に到着^{とちやく}したが波^{なみ}が高く上陸^{じやうりく}できず、十八日^{じゅうはちにち}に至^{いた}ってようやく上陸^{じやうりく}することが出来^{でき}た。山形県^{やまがたけん}の故郷^{こきやう}を発^とってから十三日^{じゅうさんにち}を要^よして利別太市^{としべつがわとし}街^{まち}に到着^{とちやく}したものであった。

父桂次郎^{ちちけいじろう}は利別^{としべつ}に到着^{とちやく}後^ご、さしあたり生計^{せいけい}のため十勝川^{じゆつがわ}を往來^{おうらい}する川船^{がわふね}の日雇^{ひやといにんぶ}人夫^{にんぶ}として大津^{おおつ}通^{つう}いの中型船^{ちゆうしゆうせん}（五十石舟^{ごじゅうこくぶね}）に乗り込^{のりこ}んだ。

作業^{さぎや}は大津港^{おおつこう}で荷物^{にもの}を川船^{がわふね}に積み込み^{つこ}内陸^{ないりく}へ輸送^{ゆそう}するもので、風^{かぜ}の無い時^{とき}には川船^{がわふね}にロープ^{ろーぷ}をかけ残雪^{ざんせつ}の川岸^{がわがし}を人力^{じんりき}で上流^{じやうりゆう}へ曳^ひき上げるとい^いう作業^{さぎや}もしばしばで、日^ひの出^でから日没^{にちぼつ}までの重労働^{じゆうらうどん}であった。大津^{おおつ}から利別^{としべつ}までは、二^に、三日^{さんにち}を要^よしたものだ。

当時^{ちんぜん}の賃金^{ちんぜん}が一日^{いちにち}大人男子^{おとなのおとこ}三十五銭^{さんじゅうごせん}から四十銭^{しじゅうせん}、食費^{しょくひ}を雇^かい主^{しゅ}に納^なめると十五銭^{じゅうごせん}から二十銭^{にじゅうせん}となり、一ヶ

月^{つき}休^{やす}まず懸命^{けんめい}に働^{はたら}いて五円^{ごえん}位^{くらい}であった。

秋^{あき}になると内陸^{ないりく}の農産物^{のうさんぶつ}を積み大津^{おおつ}へ下^{くだ}るが、大雨^{おほい}の後の増水^{ぞうすい}時^{とき}には川底^{がわすいじ}に流木^{りゅうぼく}も横^{よこ}たわり、それを川^{がわ}に入^いって除去^{じよきよ}しながらの航行^{かうかう}で、水泳^{じゆうず}の上手^{じゆうず}なアイヌの青年^{やと}を雇^かって乗^のり込^こませることもあったという」

この舟^{ふね}をひき上げる作業^{ひじやう}は非常^{ひじょう}につらかったようで、思^{おも}わず涙^{なみだ}が出る^でこともあったということです。

一方^{ひと}で、川舟運送^{がわふねうんそう}の人夫^{にんぶ}・船頭^{せんとう}には楽^{たの}しみもあつたそうです。左ページ^{ひだり}の新津^{にいづ}とよじさん^{かめぞう}の夫^{おとこ}、亀蔵^{かめぞう}さんは、利別太^{としべつがと}で米^{こめ}・酒^{さけ}などの商売^{しょうばい}をしていました。そのころ^{そのころ}の話^{はなし}を、孫^{まご}の新津安弘^{にいづやすひろ}さんが語^{かた}っています。

ちょっと「いけない」楽しみ

「祖父^{そふ}の新津亀蔵^{にいづかめぞう}は明治三十二年^{めいし}（1899）頃^{ころ}、兄繁^{しげ}松^{まつ}が始めた利別太^{としべつがと}の新津商店^{にいづしやうてん}を引き継^つぎ、米^{こめ}、酒^{さけ}をはじめ日用雑貨^{にちようざつか}を販^{はん}売^{ばい}していました。（ p163）

酒^{さけ}は開拓時代^{かいたくじだい}唯一^{たいてい}の楽^{たの}しみで、大津^{おおつ}の熊谷商店^{くまがいしやうてん}から仕入^{はんばい}れて販^{はん}売^{ばい}していたのです。

大津^{おおつ}から利別太^{としべつがと}までは帆^ほかけの川船^{がわふね}が往來^{おうらい}していましたが、下^{くだ}りはよいとしても、上^ありは大変^{たいへん}で、風^{かぜ}の吹^ふかない時^{とき}は船頭^{せんとう}たちが船^{ふね}から降^おりて綱^{つな}で船^{ふね}を引き上げるのです。

大変^{たいへん}な苦勞^{くるわう}だったわけでした。

そして酒樽^{さかだる}が大津^{おおつ}を出^でてようやく利別太^{としべつがと}の船着場^{ふなつきば}に陸揚^{りくあ}げされた時^{とき}、二斗樽^{にとだる}（約36リットル入り）の中身^{ちゆうしん}は一斗七^{いっとうしち}、八升^{はつしょう}（約30～32リットル）に減^へっているというのです。

もちろん輸送中^{ゆそうちゆう}にこぼれたわけでも、また蒸発^{じやうぱつ}したわけでもなく、船頭達^{せんとうたち}が輸送中^{ゆそうちゆう}に飲^のんでしまったというのです。

この頃^{このころ}十勝川^{じゆつがわ}の川船^{せんとう}の船頭^{せんとう}をしていた柳谷芳太郎^{やなぎたによし たらう(?)}さんは、後年^{こうねん}「新津^{にいづ}さんの酒^{さけ}はよく飲^のませてもらったもんだ」と言^いっていたといいますが、祖父^{そふ}は別^{べつ}に文句^{もんく}を言^いうわけでもなく、当たり前^{あたりまえ}のこととして受け取^うったと言^いいます。

それは、船頭達^{せんとうたち}が飲^のんでしまった例^{れい}えば二升分^{にしょうぶん}（約3.6リットル）は、残^{のこ}っている一斗八升^{いっとうはつしょう}に加算^{かさん}して売^うるから損^{そん}は決^けしてなかつたというわけでした」

いけないことではありますが、「賃金^{ちんぜん}」の一部^{いちぶ}としたという、おらかなところもあつたころの話^{はなし}です。

4 川舟人夫(かわふねにんぶ):五十石舟で10人、七十石舟で20人ほど必要だったという。
5 銭(せん):昔のお金の単位。100銭=1円。明治31年(1898)の手紙が2銭(翌年3銭)、明治30年(1897)の東京で米10kgが1円12銭、映画が20銭。(『値段の
明治大正昭和風俗史 上下』より)
6 帆(ほ):川をのぼる時は山背(やませ)を使う。山背とは海上からふいてくる冷たくしめった北東風のことをさす。

川が運ぶ木材 ... 流送

地域産業

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展と今、そして未来へ

用語

さくいん



十勝監獄(明治36年[1903]から十勝分監は独立)。この建物は山で木を切り、音更川を流し、製材し、建てるまで、受刑者たち自身がつくり上げた。(写真:帯広百年記念館蔵: 1)

林から切り出した木材を直接川にうかべ、川の流れによって下流へ運ぶ方法を「流送」といいます。

明治26年(1893)、十勝分監(刑務所支所)の建設が始まり、その材料は糠平あたり(上士幌町)の山で切り出され、音更川で流送されました。流送された木材は、今の音更町木野で引き上げられていました。(p161)

十勝分監(のちに十勝監獄)ができたあとも、昭和2年(1927)まで、帯広を中心としたさまざまな建物などの材料のために、受刑者たちは流送を続けました。

また、音更川では製紙会社も流送をおこないました。大正6~12年(1917~23)には帯広まで、その後、昭和16年(1941)までは上士幌まで、木材が流送されました。

林業と工業の発展

木材は、家・建物や生活道具の材料、燃料の木炭となるほか、鋸床(クルミ)、マッチの軸木(ドロヤナギ)、タンニン(カシワの樹皮)、線路の枕木や下駄(バッコヤナギ)、それに紙(トドマツやエゾマツ)の材料としても使われます。

明治23年(1890)、利別太(池田町)から鋸床用のクルミ材を舟便で大津(豊頃町)に出し、大津から神戸に移出していました。のち、軍備拡張でさらにたくさん本州に送られます。

明治25年(1892)、大津に十勝最初のマッチ軸木工場が建てられています。明治31年(1898)ころには3つの軸木工場があり、上流から原料のドロヤナギが流送がされていました。

明治の末には、新得町の佐幌川で木材が流送されました。

また、明治24~25年(1892~93)ころからタンニン用のカシワ樹皮が大阪に送られていましたが、明治42年(1909)には、止若(幕別町)に製渋(タンニン)工場ができました。



明治36年(1903)、利別太(池田町)にできた、マッチの製軸工場。(写真:『十勝国産業写真帖(北海道庁、1911)』より)



村田鋸(明治13年[1880]に最初の形ができた)の鋸床部分。茶色い木のところが鋸床。(協力:沖商店)

紙の原料としての木材

大正時代にはいと、製紙会社が十勝各地の山林から木材を切り出し、紙の材料としました。

十勝川とその支流(音更川、美生川、然別川など)、利別川とその支流(美里別川、斗満川、勲祢別川など)で流送がおこなわれました。

大正8年には、池田にパルプ工場ができます。昭和時代に入り、鉄道輸送、道路輸送が発達してくるにつれ、流送は減っていきます。十勝で最後まで流送をしていたのは、美里別川(本別町・足寄町)で、昭和29年(1954)まで続けられていました



池田町にできた、パルプ工場。昭和5年(1930)、閉鎖する。(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)

1 帯広百年記念館(おびひろひゃくねんきねんかん): 帯広市緑ヶ丘2番地 電話 0155

- 24 - 5352 月曜日休館

2 ドロヤナギ: ドロノキともいう。

3 タンニン: 皮をなめす(4)ための物質。渋(しぶ) 草木の中にふくまれている。皮にふくまれるコラーゲン(たんぱく質)を結合させてなめす。布の防水や魚網の強化などにも使われた。

豪快だが危険だった... 技術、判断力、勇気が必要な流送作業

流送には、それぞれの川や場所に合わせた方法があります。

上流でよく行われていたのが「堤流」でした。堤流は、川にせきをつくって水をため、その後水門を開きその勢いで木材を流すというやり方です。

1日3回くらいおこなわれていましたが、下流にもせきがある時は、とくに注意してタイミングを合わせる必要がありました。

堤流の流れはすさまじく、流れる木材が川岸をこわして飛び出したりもします。岸を直したり、引っかかった木材を流し直すなどの作業をしなければなりません。

堤流によって、水が多い川まで運ばれた木材は、自然の流れで流されました。これを「散流」といいます。

流送作業は、木材がうまく流れるように、あらかじめ川を整備したり、流れる木材に乗って下流まで運ぶなど技術、判断力、勇気が必要です。

危険な作業が多く、水に落ちて木材にはさまり、大けがをしたり、亡くなったりする人もいました。



堤流。せきの水門を開いたところ。右はしに人がいるので大きさがわかる。(写真:本別町歴史民俗資料館蔵: 6)



散流。ういた丸木に乗るのは簡単なことではない。利別川のシンコチャシ(p116:本別町西美里別)近く。(写真:本別町歴史民俗資料館蔵)

もう少し細かいこと

馬車・馬そり・修羅場・森林鉄道

流送するためには水量のある川がいります。流送できる場所までは、ほかの方法で木を運ばなければなりません。

多くの場合、馬が活やくしました。馬車、馬そりです。また、線路上のトロッコを馬がひく場合もありました。

冬場は、草や葉が少なく、雪とこおった地面のおかげで林を痛めずに通れるため、木材を運び出しやすい時期です。また、冬には農業ができないため、人や馬が集めやすくなります。

そのため、木の切り出しは冬に多くおこなわれ(冬山造材)、馬そりは、木材を運び出す重要な手段でした。ただし、急斜面で馬をあつかうのはとても危険で、高い技術が必要でした。

そのほか、急な坂に原木を落とす通路を作り、水を流すことでまさつによる発火を防ぐ「修羅場」によって、木を運ぶこともありました。

大正12年(1923)になると、陸別や足寄などに「森林鉄道」ができます。小さな汽車で、加工場や流送できる場所まで木材を運びました。森林鉄道は、地域の足としてもよく利用されました。

造材作業で飢えをしのいだ

中札内村には、福井県から多くの人が入植しました。彼らは、故郷の白山で、冬の杣夫(木を切って運び出す人)の経験がありました。

ある凶作の年、帯広市街では住宅の建築がさかんで、多くの木材が必要でした。入植者たちは故郷の経験を生かし、冬の間、日高山脈で造材作業をすることで、何とか飢えずにすみました。



木材を運ぶ馬そり。(写真:本別町歴史民俗資料館蔵)

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 そして未来へ

用語

さくいん

4 なめす(糞す): 動物の皮は、そのまま使うとすぐにくさったり、乾燥するとかたくなったりする。樹液や薬品を使ってこの欠点を取り除く方法が「なめし」である。
5 パルプ: 紙の原料となるせんい。木材チップを高温で煮ることで取りだす。

6 本別町歴史民俗資料館(ほんべつちょうれきしみんそくしりょうかん): 本別町北2丁目 電話: 0156-22-2141(内410)日曜・祝日休館

と せん も っ き ょ う 渡船から木橋、そしてコンクリートの橋へ

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や
川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展
そして未来へ

用語

さくいん



明治42年(1909)、十勝川(当時ライベツ川)の渡船転ぶくによって学校帰りの児童6人が死亡した。写真はその霊をなぐさめるための地蔵尊。(帯広市西21条北5丁目 中島霊園近く)



大正9年(1920)ころの地形図。「橋山栗」と書いてあるのが、栗山橋のこと。(国土地理院所蔵の1/5万地形図「帯広」を使用・着色)



今の札内橋(札内川)。帯広市と幕別町を結ぶ。

舟で川をわたる場合、タイミングが合わないと、待たなければなりません。川の水が増えれば、わたれなくなり。さらに、舟はひっくり返ることがあり、荷物が流されたり、人がおぼれ死ぬこともあり。橋があれば、そうした問題が解決します。しかし、大きな川に橋をかけるには、かなりお金がかかります。

多くの場合、最初は、地元の人々が自分でお金を出したり、集めたりして「私設」の橋としてかけました。そのため、わたるのにお金がかかる橋も多くありました。

また、初めは木材でできた「木橋」をかけるのですが、洪水になるとこわれたり流されたりしやすいという問題がありました。

また、初めは木材でできた「木橋」をかけるのですが、洪水になるとこわれたり流されたりしやすいという問題がありました。

札内川にかかる「栗山橋」そして「札内橋」

明治31年(1898)栗山常次郎が札内川に、帯広と札内(幕別町)を結ぶ「栗山橋」をかけました。今の札内橋より、ずっと下流です。

この年、大洪水があり(p186)、栗山橋は流されてしまいましたが、翌年、常次郎はかけ直します。

わたる時は有料で、人は1銭、馬は2銭かかりました。料金の持ち合わせがない人は、浅いところを選んでわたったといひます。明治40年(1907)には国管理の橋になりました。

大正11年(1922)、かけかえられて「札内橋」と名づけられます。その後、昭和32年(1957)、今の場所にコンクリートの「永久橋」がかけられ、さらに昭和61年(1986)、もう2車線ぶんの橋がかかって、今のすがたになりました。

十勝川最初の橋「開成橋」

明治38年(1905)、帯広町(帯広市)と音更村(音更町)の7人が組合を作り、現在十勝大橋があるあたりの十勝川に、長さ96mの「開成橋」をかけました。わたる時にはお金がかかりましたが、利用者には大変喜ばれました。

帯広市にある、2万4千年以上前の「若葉の森遺跡」には、音更川下流でひろった黒曜石を使った石器が見つかりま。そのころの人も、当時の音更川合流点の近くで十勝川をわたっていたようです。(p76)

開成橋は、少なくとも2万4千年以上ある「帯広～音更間の十勝川をわたる歴史」の中で、初めての橋なのです。



明治38年(1905)にかけられた開成橋。

(写真:「十勝川写真で綴る変遷」より)

1 銭(せん): 昔のお金の単位。100銭=1円。明治32年(1899)の手紙が3銭、明治35年(1902)の東京で米10kgが1円19銭、明治33年(1900)の東京で映画が10銭。(『値段の明治大正昭和風俗史 上下』より)

2 当時の音更川合流点(とうじのおとふけがわごうりゅうてん): 川の流れは氾濫原(はんらんげん: p46)の中で大きく変わることがあるため、昔の十勝川が今の場所であったとは限らない。

「東洋一」といわれた、初代の十勝大橋 ... 開成橋、河西橋、そして十勝大橋

開成橋は木橋でした。洪水でこわれるたびに修理をくり返していました。

明治43年(1910)、北海道の役所である河西土木派出所が長さ114mの「河西橋」をかけました。かなりがんにょうにつくられた木橋だったのですが、大正8年(1919)には洪水で流されてしまいます。

河西橋は、長さ186mにかけかえられますが、その後も洪水には痛めつけられ、毎年のように修理が続けられました。

十勝にはさらに人が増え、人やものの行き来が多くなります。音更と帯広をつなぐ橋をがんにょうにして、簡単にはこわれないものにする必要性が高くなりました。

昭和15年(1940)、長さ369m、はば18mのコンクリート橋(永久橋)である新しい河西橋がかけられ、「十勝大橋」と名づけられました(旧十勝大橋)。当時としては新しい工法が取り入れられ、世界的な名橋として「東洋一」と賞賛されました。

この十勝大橋は、その後55年間、十勝の交通と産業を支え続け、まだまだ橋として活やくできました。

しかし、このあたりでは堤防と堤防の間がせまいために、洪水が流れにくくなっていました。そこで、音更町側の堤防を引いて堤防の間を広げる「木野引堤事業」がおこなわれることになり、これによって、平成7年(1995)、新しい十勝大橋がかけられました。

開成橋、河西橋、そして十勝大橋



明治44年(1911)開通した河西橋。(写真:『十勝国産業写真帖』より)



新しい河西橋(旧十勝大橋)の工事。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)



旧十勝大橋。昭和15年(1940)～平成7年(1995)。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

さようなら旧十勝大橋 ... 今も少しだけ残っている

今の十勝大橋がかかり、それまでの十勝大橋(旧十勝大橋)はこわされることになりました。しかし、55年間十勝の交通を支え、しかも、55年後の車社会になっても充分役割をはたし続け、何より、住民に親しまれてきました。

そこで、平成8年(1996)、住民の会、帯広市、音更町、帯広開発建設部がいっしょになって「さようなら旧十勝大橋」という、お別れのイベントを開きました。

太鼓の演奏があり、子どもたちのフリーマーケットがならび、あるいは、橋にそれぞれの思いを落書きしたりもしました。最後にわたり納めをして、橋に別れを告げました。

今でも、帯広側の橋台(橋のはしを乗せるところ)が残

されています。



「さようなら旧十勝大橋」。わたり納めをする住民。後ろが今の十勝大橋。

3 世界的な名橋(せかいてきなめいきょう): 旧十勝大橋は、当時としては最も進んだ技術をさまざまなところで使った鉄筋コンクリート製のゲルバーけた橋(橋げたに関節のようなところがある橋)で、橋脚(きょうきゃく: 橋をささえるところ)と橋脚の間

の長さは当時日本一、橋の面積は当時世界第2位だった。くわしくは、十勝川インフォメーションセンター(帯広市大通り北2丁目 電話: 0155-23-2160 月曜休館)に解説してある。 1 銭(せん): 昔のお金の単位。100銭=1円。明治32年(1899)の手

鉄道の開通、消えていく川舟

地域産業

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

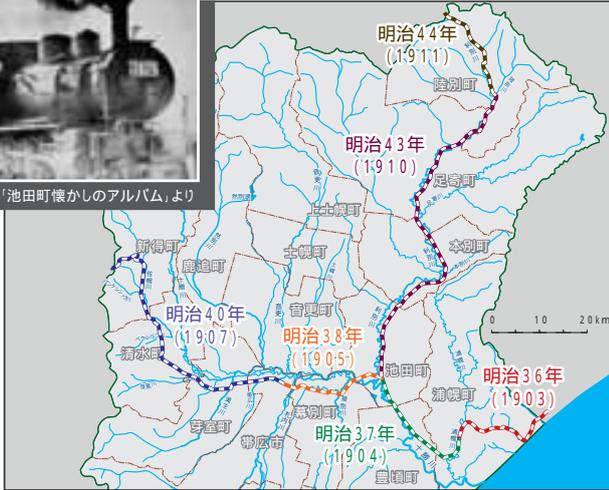
第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



写真：『池田町懐かしのアルバム』より



明治38年(1905)、釧路～帯広間(釧路線)が、明治40年(1907)、旭川～帯広間(十勝線)が開通した。左上は釧路線開通時の機関車。(市町村名・市町村境界は平成19年現在のもの)



池田停車場構内の建設作業のようす。明治37年(1904)。(写真：『池田町懐かしのアルバム』より)

明治36年(1903)釧路からの線路が、浦幌までのばされました。十勝に鉄道がやって来たのです。次の年、鉄道は豊頃、さらに池田までのびます。

そして、日露戦争が終わった明治38年(1905)、釧路と帯広の間に「釧路線」が開通しました。さらに明治40年(1907)には狩勝トンネルが完成、帯広と旭川を結ぶ「十勝線」が開通し、鉄道で札幌・小樽とつながりました。

(戦争 p196)

さらに、明治43年(1910)には、池田～陸別間が、大正元年(1912)には、陸別と網走が結ばれました。

こうして、これまで川舟にたよっていた重い荷物や大量の荷物を、陸上で運べるようになったのです。また、物のほか文化的な面でも、釧路や札幌とつながりました。

人が減る「舟着き場の街」大津・利別太

鉄道開通により、明治38年(1905)を境にして、十勝開拓を支えてきた川舟運送(p175)が消えていきます。

十勝の表玄関として栄えた大津(豊頃町)も、利別太(池田町利別南町)も、大きな川舟が着き、荷物を積み降ろし、また、海の船や別の川舟に積みかえる場所として発展してきた街です。

鉄道が開通すれば、舟は利用されなくなり、荷物は鉄道の停車場(駅)に集まり、港は釧路港が使われます。そのため、舟着き場の街は、旧市街としてすたれていきました。

利別太の市街地は、利別停車場前に移りました。

さらに明治43年(1910)には、陸別と池田停車場との間に鉄道がつながります。翌年には利別橋(今の池田大橋)ができたことで利別から人が移り、池田停車場前に市街地ができました。

武山・猿別から止若へ

同じように、鉄道の停車場(駅)が止若(幕別町本町)にできたことで、武山(幕別町旭町)と猿別(幕別町)にあった舟着き場の街からも人が減っていきます。

明治39年(1906)には猿別川に止若橋(木橋)がかかり、止若と、札内(幕別町)・帯広が陸路で直線的に結ばれました(今の国道38号幕別～帯広間)。

明治40年(1907)ころには、止若停車場前(幕別駅前)に、学校、役場、郵便局なども移り、新しい市街地ができました。

このように、川舟の役割は小さくなりましたが、川舟すべてが消えたわけではありません。橋がかかっていないところでは、「渡船」がまだまだ活やくしていました(p176)。



平成17年(2005)の猿別川下流部と幕別市街地。かつての武山市街は十勝川近くにあった。

1 鉄道(てつどう)：鉄道工事は、監獄の受刑者(p160)や「タコ」と呼ばれる人たちがよく使われた。タコというのは、逃げないように閉じこめられ、ろくな食事も与えられず、暴力でおどされながら、最もきびしい作業をさせられた人々で、だまされ

たり、借金を負わせたりして連れてこられた。安く、早く建設するという国などの方針がもとになって生まれた、非人間的な働かせ方であった。受刑者とともに、多くの死亡者が出た。のちに、朝鮮などから連れてこられた人々も、同じ目にあうことがあった。

戦後も進んだ開拓



湿地(☒)が多い、昭和21年(1946) 農地(□)が多い、昭和58年(1983)
発行の地形図による十勝川下流部。 発行の地形図による十勝川下流部。



戦後に開拓が進んだ、上の地図と同じ十勝川下流部。平成17年(2005)。



排水路(手前)などによって、かつての湿地が畑になった。(浦幌町字愛牛)

農地改革・農地解放の功罪

池田農場(池田町)などのように、太平洋戦争より前に農地解放がおこなわれ、小作者が農地を手にした場合もあります。

池田農場では、昭和16年(1941)に、様舞・清見などの農地が67戸の農民に解放されていました(p165)。その際、清見ヶ丘公園の寄付もおこなわれています。

こうした戦前・戦中・戦後の農地解放や農地改革は、多くの小作者にとっての夢であった自作農を実現し、地域に生きる農民としての活力を生み出しました。

一方、多くのアイヌの人たちは、「旧土人保護法」などで得た土地を和人農民に貸していました。彼らは、農地改革によって、この土地を失ってしまうことになったのです。(p149)

太平洋戦争最後の年の昭和20年(1945)、本土空襲が激しくなります。家を焼かれ、仕事を失った人たちが、「帰農者」として北海道へ入植、十勝にも移住しました。

戦後には、日本全体に食料が不足したため、食料を増産する必要が生まれます。一方、中国東北部(旧満州)やサハリン(旧樺太)を開拓していた人たちは、敗戦によって日本にもどり、生きていく場所を探していました。こうした「引き揚げ者」の人たちなども、戦後開拓者として十勝に移住してきました。(太平洋戦争 p197)

また、昭和22年(1947)には、農地改革がおこなわれました。

これにより、地主が自分で耕作しないで農民(小作者)に土地を貸し、小作料として生産物や代金を受け取っていた場合(小作制)、農地が国に買い上げられ、直接耕作していた人たちに安くあたえられることになりました。

(地図は国土地理院刊行の1/5万地形図(浦幌)を使用・着色)

失敗も多かったが新しい農地が広がった

新しい入植者には、いい土地があたらないことも多く、また、とくに北国の農業になれていない人にとっては、困難の連続で、うまくいかないこともよくありました。

しかし、一方で、これまで開拓されていなかった土地が、新たに農地となることで、十勝の農業は活気づきました。

例えば、十勝川下流部の幌岡(豊頃町)、愛牛・豊北(浦幌町)などには湿地帯が多かったのですが、開拓者の努力や排水路整備など国による農地開発により、今では畑や牧草地が広がっています。



池田町の清見ヶ丘公園。池田農場の農地解放とともに、池田町に寄付された。

2 小作者(こさくしゃ)・地域に生きる(ちいきにいきる)・活力(かつりよく)：土地を持つ農民(自作者)になることは、地主に苦しみられない代わりに、すべての結果が自分の責任となる。小作者にはこの責任感が生まれにくい場合があった。また、小作

者は農場を移り変わることもよくあったため、地域との関係がうすかった。農地解放や農地改革には、小作者だった人たちに、やる気と責任感、地域の一員としての自覚を与えることによって、農業生産性を上げようとする意図があった。

国際理解
地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん

3. 開拓者をおそう洪水・そして新水路づくりへ

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や
川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

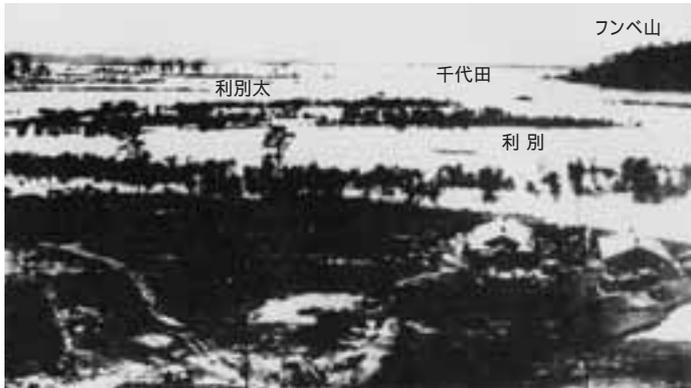
第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

川に飲みこまれる開拓地



大正11年(1922)の大洪水。清見ヶ丘から見た利別・千代田(池田町)。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

明治時代の十勝川は、今とちがって曲がりくねり、堤防もあまり整備されていません。大雨が降ったり、山の雪が一度にたくさんとけたりすると、川はあふれ、川ぞいの開拓地は水に飲みこまれました。

開拓、農業、そして暮らしは、洪水との戦いでもあったのです。

十勝の開拓が一気に進んだ明治29年(1896)以降、たびたび大きな洪水がありました。とくに、明治31年(1898)と大正11年(1922)の洪水は、たくさんの死者が出るなど、すさまじい被害をもたらしました。

多くを失い、別の場所に移り住む人、さらには家族が別れ、はなればなれになった人たちもいました。



洪水の中で大切な馬を死守する開拓者。葦派村(池田町大森)に入植した上徳善七(右ページ)が描かせた絵。(上徳善司氏蔵)

明治31年(1898)の大洪水

9月2日から大雨となり、4日には晴れますが、5日から7日までまた大雨となりました。

利別太(池田町)では、水面がふだんより2mくらい高くなり、統内(池田町・幕別町・豊頃町)では、高台と高台の間が、はば約8kmもの水面となりました。

逃げおくて、流される家の屋根の上で泣きさげ人もいました。首だけ出して流される馬もありました。

流されなかった家もこわれ、ド口をかぶりました。作物がダメになり、多くの人がたくわえた食べ物をなくしました。

十勝での死者は21人、流された家が340軒、水につかったり流されたりした畑はおよそ6,000畝¹にのぼりました。

大正11年(1922)の大洪水

8月24日、台風が近づき大暴風雨となりました。

25日には十勝川全体が大洪水となりました。千代田下流(池田町・幕別町)から大津河口(豊頃町)までの川ぞいの土地が水につかり、一面、湖のようになりました。

粒刈石(池田町川合・昭栄)では、床上6尺(約1.8m)まで水が達した所もありました。

十勝地方の死者は9人、こわれたり流された家が240軒、水につかったり流された田畑が5,000畝¹以上にもなりました。



大正11年(1922)の洪水で、水に入って作業する人(池田駅前)。(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)

1 ヘクタール:面積の単位。1ヘクタールは、100m×100mの正方形の広さ。

2 氾濫(はんらん):川の水がふだん流れているところからあふれ出すこと。堤防(ていぼう)がある場合は、堤防からあふれ出すこと。

明治31年の大洪水の思い出 ... 「誰も物を言う人はいなかった」

ここでは、「池田町開拓夜話」から、明治31年(1898)の大洪水の思い出を紹介しつづけます。(一部省略)

南部小三郎さんの話

明治三十一年九月六日、七日頃利別川が大氾濫した。川沿いに居た自分達八戸は家財道具を天井につるして、八線の高台地に腰まで水につかり手をとり合って避難した。

高台にやっとたどり着いて後を見ると、自分達の小屋八戸は皆流され、柱が何本か見えただけだった。この三十一年の大洪水で小屋の跡に残っていたのは、鉄びんのふた一つだった。誰も物を言う人はいなかった。

林松太郎さんの話

明治三十一年秋の大洪水で小屋は流され、二晩も田中と一緒に薪の間に野宿した。

この水害の時、八木が丸木船で助けに出た。水は七、八尺位(約2~2.5m)あり、水が屋根までつくと、家がポコンと浮かんで流れていった。

新津とよじさんの話

十勝川の氾濫でそこら一面は泥の海となって家も畑もあったものではありません。命からがら避難するのが精一杯で、家族を呼び合う声が地獄へ落ちていくような痛々しいものでした。

となりの斉藤さんは四斗樽(およそ72リットルの樽)を船の代わりにして命からがらフンペン山へ辿り着いたと、後で聞きましたが、あの恐ろしさは生涯忘れることはできません。

「誰も物を言う人はいなかった」

「川合開拓七人会」の思い出から
入植して数年後、何とか食糧の蓄えも出来て、販売作物を作り始めた時、天は容赦なく大きな試練を下した。

明治三十一年九月の大洪水である。十勝川の東西六キロから八キロにおよぶ流域の平野部を一本の大河と化し、泡立つ濁流が渦を巻いて流れる様は物凄く、入植者達は家も家財も捨てて丸木船で高台地区へ避難した。まして濁流の中に首だけ出して流れ去る馬を助ける術は全く無かった。

この時、平井春吉氏(川合開拓七人会の一人)の家も流失し、また神谷常吉氏(川合開拓七人会の喜作氏の長男)は大木にくくりつけた丸木船の中で、飲まず食わずで二昼夜を過ごしたという。

水害後流失をまぬがれた家とて泥に埋まり、収穫の秋を目前にした作物もまた流失して見る影もなく、鋤を手にする元気もなく、ただ茫然として途方にくれるのみであった。

政府では罹災者一戸当たり五十円の現金と、救助米として南京米の貸付けをしてくれたが、この洪水を契機に入植者の中には危険な川の流域を離れ、高台地や他の土地に移動する者も多くなった。

(『川合開拓七人会』とは、川合地区〔池田町〕で開拓を続けた人たち7人が、昭和26年〔1951〕に結成したもの)
(『川合のあゆみ(1978)』より)

上徳善七さんの話

明治三十一年の大洪水の時は大金を出してようやく手に入れた一頭の馬を守るため、流れそうな家の屋根に上り馬のたづなを引いて助けたものでした。(左ページ絵)

アイヌの人たちによる救助 ... 明治31年の大洪水の記録

明治31年(1898)の大洪水の時には、こんな記録も残っています。(やさしいことば・文に直してあります)

「札内川にかけられていた栗山橋(今の札内橋)は、7日正午12時ころ、流木のために破壊され、人馬の交通がとだえた。(栗山橋 p182)

この橋から下流、十勝川までの間では、札内川の水が十勝川のはげしい流れにさえぎられ逆流したために、安木マツチ製軸所と付近の人家が水につかった。逃げおくれで屋

上で助けを求める人たちがいた。

大変危険な状態にあるのを見て、高地に住んでいたアントマツ、ツウプトアイノ、アシノマツ、カイキマツ、シマキアイノ、チャマート、イタコランら男女7人のアイヌの人たちが丸木舟2艘を出し、激流の中をこぎわたり、安木マツチ製軸所から22人、その隣の家から2人、増田伊吉家7人を救助した」

「帯広市史 平成15年編」より

3 罹災(りさい): 地震・台風・洪水・津波・噴火・火災などといった災害にあうこと。
4 円(えん): 明治31年(1898)の手紙が2銭=0.02円、明治30年(1897)の東京で米10kgが1円12銭=1.12円、映画が20銭=0.2円。(『値段の明治大正昭和風俗史 上下』より)

5 南京米(なんきんまい): インド・タイ・インドシナ(今のベトナム・ラオス・カンボジアなど)・中国などから輸入した米のことを一般にこういった。

十勝川切りかえの対立

国際理解
地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語
さくいん



大正6年(1917)、西士狩(芽室町)住民によって、十勝川の流はライベツ川に切りかえられ、のちに、もとの十勝川はほとんどすがたを消した。
(国土地理院所蔵の1/5万地形図(帯広)を使用、着色)

雨の中の実力行使

大正6年(1917)の7月、雨の中、西士狩の住民は美生川合流点に向かいました。美生中島住民の反対をおし切り、十勝川の流れをライベツ川に切りかえようというのです。

これを知った美生中島の住民は、実力でやめさせようとします。また、芽室村の村長も、何とかおさめようとします。

しかし、西士狩住民は切りかえ作業を続け、十勝川はその流れを真東のライベツ川へと変えることになりました。今の流れとほとんど同じになったのです。

その後、美生中島の暮らしには問題が多くなり、住民は新たに暮らす場所を探し、移り住んでいきます。

芽室町の下美生、大成、北伏古、新生などに移る人もいれば、中には遠く南アメリカに移住した人もいました。

少しずつ川の整備は進みましたが、大正時代になって、十勝川は大きく曲がり、枝分かれをしていました。芽室町美蔓から西士狩にかけての十勝川本流は、美生川の合流点から北に大きくカーブしたあと、今の美蔓川にそって南に下っていました。今十勝川が流れているところは細い枝川で、ライベツ(アイヌ語で古い川の意味)川と呼ばれていました。

この十勝川とライベツ川にはさまれたところは美生中島と呼ばれ、明治29年(1896)から岐阜や富山の開拓団体が入植していました。(開拓団体 p166)

一方、十勝川をはさんだ東側の西士狩でも、早くから鈴木銃太郎(晩成社: p158・p143)らに始まる開拓が進み、明治30年(1897)の加賀団体(石川県)などが移住していました。

十勝川をはさんだ対立

明治31年(1898)の大洪水など、十勝川ぞいの開拓地はたびたび洪水によって被害を受けました。

西士狩地区では、上流で大きく曲がった十勝川から水があふれることによる被害が大きく、住民は上流の直線化を望んでいました。

しかし、美生中島地区にとっては、十勝川が北に流れることで、洪水の被害が小さくてすんでいたのです。

十勝川をはさんだ2つの地区の間には、対立が生まれました。



美蔓川が十勝川に合流しているところ(芽室町)。明治時代終わりころの十勝川は、赤い点線あたりを通過して、今の美蔓川下流のところを流れていた。

古い地形図を見る ... 明治29年ころからの移り変わり

地形図は、地形や川、土地利用、集落、道路、鉄道などを正確に表示した地図です。5万分の1のものと、もっとくわしい2万5千分の1のものなどがあります。

土地のようすは、だんだんと変わっていくので、間を置いて調べ直し、そのたびに新しい地形図に直していきます。ですから、古い地形図と最近のものとをくらべると、川の流れや道などの変化がわかるのです。

十勝についての最も古い地形図は、明治29年（1896）につくられたものです（5万分の1だけ。十勝の2万5千分の1地形図は戦後から）。

帯広市街地周辺の地形図を、いくつかならべてみました。変化を見てみましょう。

古い地形図の入手方法は、国土地理院のホームページ（<http://www.gsi.go.jp/>）から「地形図図歴」のページを探すとわかります。



注：たて横に入っている直線は、植民地の区画線で多くが道ではない(道であるところも)



明治29年（1896）製版

この場所で最も古い地形図。

昔は横書きの文字は、右から左へ読んでいました。ただし、カナの小さな文字（ッ、ヨ、エやアイヌ語名のノなど）は、前の文字の右下に書いてあります。

左地図の「ケレペレペオ」は「オペレペレケ」ではなく、「オペレペレケ（今の帯広川）」と読みます。また、「トラバ」は、「パラトー」と読みます。

大正11年（1922）発行

川の流れがかなり変わっています。札内川（とそのまわり）の流れがまとまり、また、札内川と十勝川が、この地図の中で合流しないまま東（右）に向かっていきます。札内川は、この先、おもに今のメン川（幕別町）を流れています（p171）。

白黒の地図は読みにくいので、188ページのように、目的に合わせて色をぬった方がいいかも知れません。

昭和21年（1946）発行

この20年くらいの間に、大きく変わったことは、帯広川（地図には『川廣帯』とある）が、まっすぐな流れにほられていることです。また、よく見ると、札内川や十勝川に堤防がつくられています。

地形図は実際のようすを調べて、直すのに時間がかかります。この地形図の場合は、昭和19年（1944）に調べられています。

平成9年（1997）発行

最近の地形図です。帯広川が札内川に合流しています。

この図は平成8年（1996）に一部修正されたのですが、調査は前の年です。その後の変化は入っていません。

この図の十勝大橋は、ひとつ上の地図と同じ場所にあつて、平成7年（1995）につくられた今の十勝大橋ではありません。新しい地図でも、情報が今のものとは限らないのです。

(このページの地図は、国土地理院刊行・所蔵の1/5万地形図「帯広」を使用。色文字は、もとはどの地図にも入っていません)

1 ホームページ：ホームページ(ウェブサイト)は閉鎖されたり、URL(アドレス)が変更されて、ご覧になれない場合があります。

人がつくれた十勝川 ... 統内新水路

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

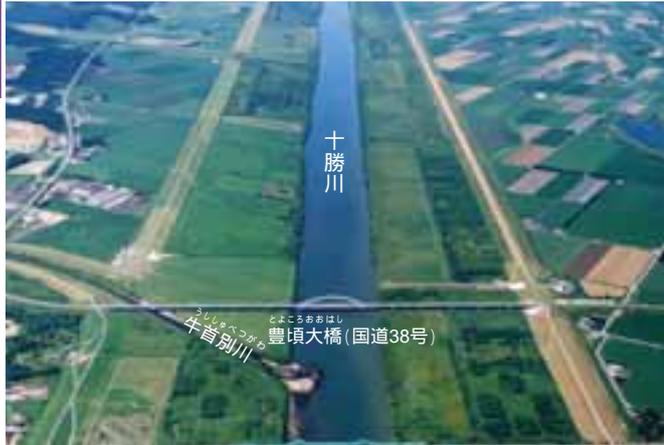
第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

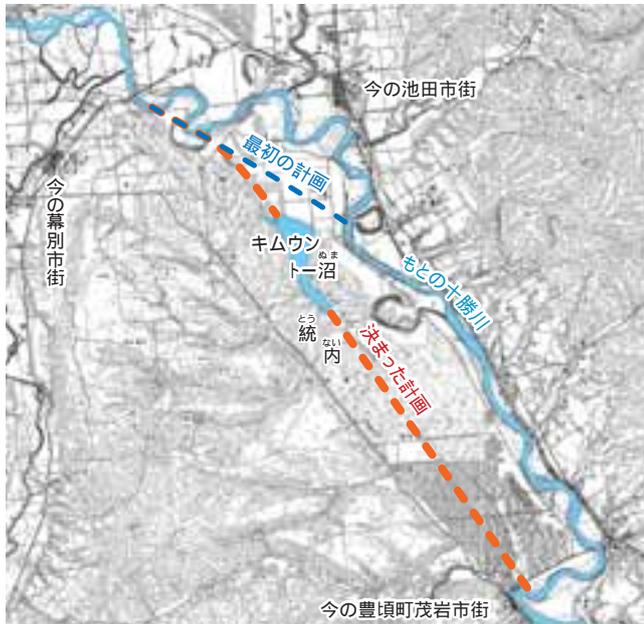
第5章 発展と今、そして未来へ

用語

さくいん



豊頃大橋(豊頃町)から上流の十勝川。このまっすぐな流れは、人がつくれた「統内新水路」。



もとの十勝川(—)と最初の新水路計画(—)と、変更になったあとの計画(—)。(国土地理院所蔵の1/5万地形図を使用、25%に縮小・着色)

水路をほる「エキスカベーター」²

水路は「ベルトコンベアー式ラダー・エキスカベーター²」という機械が水路ぞいに移動してほっていきました。

この機械は、ベルトコンベアーにいくつものバケツ(バケツのようなもの)がつけてあり、これを回転させることで土をほるものです。

工事現場には、このエキスカベーターが移動するための線路がしかれました。

機械だけではなく、人の力でもほられていて、刑務所の受刑者も活やくしました。



明治31年(1898)の大洪水をはじめ、川ぞいの農地は何度も洪水の被害をうけます。(p 186)

何とか十勝川の流れをよくして、洪水を減らしたい。そんな開拓者たちの思いは、強くなるばかりでした。

明治時代の終わりから「北海道拓殖計画」が実行されます。その中で、十勝川の下流をまっすぐにするこ

によって、流れをよくしようという計画が立てられました。

さらに、大正11年(1922)の大洪水(p 186)がこの計画をおし進め、昭和3年(1928)工事は始まりました。

工事は、はじめ千代田から川合(池田町)を通り、今の旧利別川へつながるような水路をほる計画でした。しかし、地元に住む人たちから必死の願い(p 192)があったことと、湿地帯の水はけをよくして農地を増やす目的のため、新水路のルートは変更されます。

千代田から茂岩まで15kmをほる

昭和6年(1931)新しいルートが決まりました。千代田から、「キムウン トー沼(池田町)」を通って茂岩(豊頃町)まで達する、およそ15kmという水路をつくることになったのです。

これにより、長くスムーズな水路ができる上、豊頃~茂岩(豊頃町)にあった、大きなZ字カーブがなくなることで、十勝川下流全体がかなり直線的になり、洪水の流れがとてよくなることになりました。

さらに、湿地帯が多かった統内原野(池田・幕別・豊頃)にまたがる平野部)の水はけがよくなり、新しく農地をつくりやすくなります。



(上) 統内新水路をほるエキスカベーター。(円内) 小型のエキスカベーター。(左) 受刑者が監視されながら働いているところ。

(写真:「十勝川写真で綴る変遷」「十勝川治水史」より)

1 住民からの願い(じゅうみんからのねがい): はじめの予定地である川合地区(池田町)の住民にとって、入植以来洪水(こうずい)とたたかひながら守り、つくり上げてきた畑の土がほられ、堤防(ていぼう)に使われることは許せることではなかった。また、打内太(うちうち)う

つないぶと: 豊頃町北栄)や育素多(いくそ)た: 豊頃町)の住民にとって、もとの十勝川は、洪水によって作物をうばいどる「無くなってほしい川」であった(p 192)

2 エキスカベーター: 土をほる機械のこと。今ではパワーショベルがこれにあたる。

機関車や馬の力で運ぶ土

土運車という、土を運ぶ台車のためにも線路がしかれました。

土運車は連結され、これを蒸気機関車が引っぱって運んでいきました。工事のためだけの蒸気機関車が走っていたのです。ほった土は、堤防をつくるために使われました。

機関車のほかに、馬も土運車を引っぱりました。

馬は昭和35年（1960）くらいまで、機関車は（ディーゼルも入れて）昭和37年（1962）くらいまで、川の工事で活やくしました。



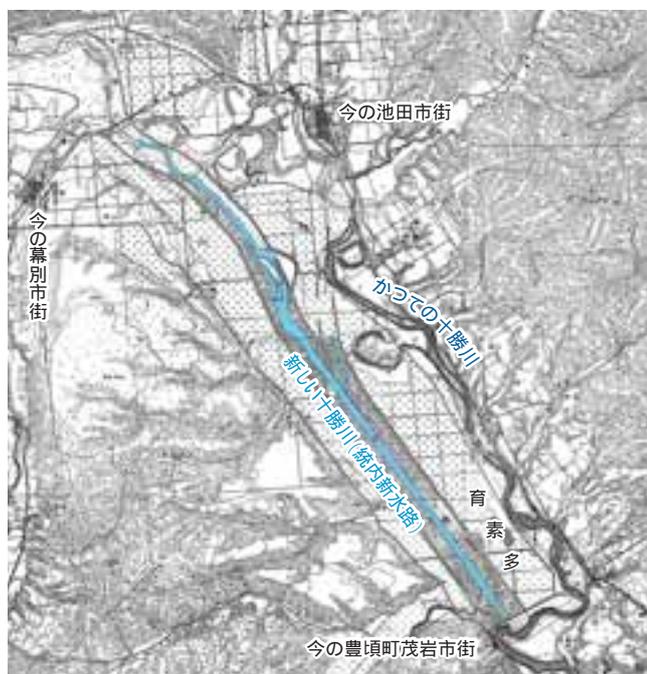
作業をした人々と、蒸気機関車。左後ろが土運車。



キムウントー沼に土砂を運ぶ馬車。



昭和35年（1960）ころまで、馬車によって土砂が運ばれた。



(上) まっすぐな統内新水路によって、十勝川の水は流れやすくなり、洪水の被害が大きく減った。



(右) 昭和12年（1937）、洪水によって新水路に水が流れこんだところ。

洪水による通水

昭和12年（1937）、ほとんどの水路が完成していたときに、洪水が起きました。

この時のことを、昭和10年（1935）から育素多（豊頃町）に移住していた村上五作さんが、のちに書き残しています。

「三年続きの洪水かと、天を仰ぎ、川岸の高地を水が乗り越えて来ないように神に祈った時、奇跡が起きたのです。増水が止まったのです。そして二、三時間後には水が減りはじめたのです（豊頃よもやま話作品集 あかだも『曲がっていた川』より）」

新水路には、工事をするために十勝川から水が入らないよう堤がつくられていましたが、洪水は、この堤を乗り越え、くずして流れこみました。そのため、十勝川の水の量が減ったのです。

こうして、最後は洪水の力で、そして、その洪水の被害を防ぎながら、千代田～茂岩の間に新しい十勝川（統内新水路）が生まれました。

(このページの写真は、4点とも十勝川写真で綴る変遷より、また地図は、国土地理院所蔵の1/5万地形図を使用、25%に縮小・着色)

3 受刑者（じゅけいしゃ）：犯罪をおかし、裁判の結果、刑務所（けいむしょ）に入れられて自由をうばわれた人。
4 土運車（どうんしゃ）：土を運ぶ台車（トロッコ）、20トン蒸気機関車は、5合（3m

3）土運車30両を引く。馬は1合（0.6m³）土運車を4両引く。
5 豊頃よもやま話作品集 あかだも（とよころよもやまばなしさくひんしゅう あかだも）：豊頃町豊寿大学文学部（ほうじゅだいがくぶんがく）編集

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

“この川さえ無かったらなァ” ... 「魔の川」でもあった旧十勝川

とうないしん すいりょう
 統内新水路のルートは、最初の計画から変えられて
 います。そこには、最初の計画予定地であった川合地
 区（池田町）の人たちの「入植以来洪水とたたかいな
 がら守り、つくり上げてきた畑の土がほられ、堤防に
 使われることは許せない」という声と、打内太（豊頃
 町北栄）や育素多（豊頃町）の人たちの「毎年のよう
 に洪水をもたらす十勝川は、無くなってほしい川だ」
 という思いがありました。（ p190）

昭和63年（1988）、統内新水路の記念碑が建てられた
 ことに寄せた、嵐正義さんの文章を紹介します。

先人たちの勇気を讃えて 嵐 正義

今回、十勝川新水路五十周年記念事業として、「記
 念碑」建立が実現したことに対し、町並びに関係機関
 のご理解とご援助のおかげと、心から感謝申しあげま
 す。

これが実現するに至ったそもそもの起因は、昭和六
 十年（1985）十月、豊寿大学文学科主催の“豊頃よも
 やま話座談会”（北栄、十弗、礼文内地区）での古老の
 ご発言でありました。

この地区の昔を知るためには、先ずもってこの地を
 流れていた旧十勝川の水害を切り離しては語れない位、
 水害に苦しめられた土地柄でありました。

古老方のお話しによりますと、洪水の度に川は母な
 る川から魔の川に変身し、幾多の人命と畜命を奪い、
 更に一年の稔りを根こそぎもぎとり、人々をして、父
 祖が志して入植したこの地を捨て高台地区に移住しな
 ければならない程、苛酷をきわめ、水害は、大なり小
 なり毎年のように襲ったとのことでもあります。

そんな折、十弗市街地に説教所を開いて布教活動を
 しておられた泉沢天外師のもとに集まった人たちが、
 茶のみ話の中で、毎年暴れる十勝川への愚痴から、「こ
 の川さえ無かったらなァ」とこぼした一言からヒント
 を得て、この川の流を統内側に変えることが出来な
 いかと話が弾み、「やれるだけやってみよう」とすぐ
 さま行動に移った先達たちは、町に道にと、誠意を持
 って陳情に当られました。

土地を愛し、家族を愛した先達たちの情熱は、地域
 を動かし、行政を動かし、絶対実現しそもない、夢
 物語に等しい“たわごと”を、立派に町づくり、国づ
 くり結びつけたのであります。

せん だつ とう ほん せい そろ
 先達たちの東奔西走のご苦労が実り、昭和十二年完
 成された新水路に川の流を切り換えたことにより、
 水害のない現在の肥沃な穀倉地帯に生まれ変わったの
 であります。

これもひとえに、この人たちを後で支えたご家庭
 や、“たわごと”にも似た発想にも、誠意をもって対
 応された町村や道、国のご援助のおかげと、只々、頭
 を下げのみであります。

そして、住民主役の地方自治のお手本として、いつ
 までも町の歴史に残る記念碑建立をのぞむ古老のお言
 葉に私共は感動し、実現のための協力を誓いあったの
 です。

時、あたかも水路完成五十年という節目の年を迎え
 るに当り、文学科にて記念碑建立の趣意書を作り、当
 該地区の区長会に訴えたところ、早速これが実現のた
 めに、地域や行政に図られ、現在に至ったのでありま
 す。

これで水害と闘った当時の人々や、水路変更のため
 に家業を省みず地域のために献身された先達たちのご
 苦労も些少なりとも報われると、喜ぶものであります。

この川との生活に明け暮れた人々の苦しみは、村上
 五作氏が“豊頃よもやま話”（町民芸誌『河口』に
 発表）の中でつぶさに書かれていますので省略します
 が、夢物語りにも等しい発想を採り上げられた行政の



昭和63年（1988）、茂岩橋下流の堤防に建てられた「十勝川統内新水路記念碑」と、あとで後ろに取りつけられたプレート。

1 豊寿大学（ほうじゅだいがく）：豊頃町の高齢者学級。さまざまな分野の「科」がある。
 2 よもやま話（四方山話：よもやまばなし）：いろいろな話。
 3 先達（せんだつ）：ある方面でりっぱな仕事を、あとの人を導く人。先輩（せんぱい）。

4 陳情（ちんじょう）：えらい人、とくに議会や政治家、役所などに今のようすを述べて、何とかしてくれるようたのむこと。
 5 たわごと：ばかげたこと。

第1章 十勝の平野や川ができるまで
 第2章 先史時代と川
 第3章 アイヌ文化と川
 第4章 十勝開拓と川
 第5章 発展、そして未来へ
 用語
 さくいん

けつだん ささ せん だつ こう せき えい えん
決断と、それを支えた多くの先達たちの貢績を、永遠
に記念できるこの碑の建立は、正に時期を得た快挙と
して、心からの拍手をおくりたいと思います。

わが郷土豊頃の開拓の歴史の中に、二宮報徳会の偉
業と併せて、この先達たちの偉業も町史を飾ることで
しょうが、最後に私共が古老からお聞きした勇気ある
先達のご芳名を記しましたが、ご芳名の洩れがありま
したらお許し下さい。

- 元豊頃村長 小林 官太 元豊頃村議 美馬 清作
 - 元豊頃村議 石田 平蔵 元豊頃村議 堀田謙次郎
 - 元道会議員 山本与七郎（池田町）
 - 豊頃側住民 山崎惣次郎 豊頃側住民 吉村政治郎
 - 豊頃側住民 竹田 夏樹 川合側住民 神谷 兵作
 - 川合側住民 神谷 常吉 川合側住民 久保田康雄
- （敬称略）
（『豊頃よもやま話作品集 あかだも』より
漢字・かなづかいなどは原文のまま）

上の文章の中に出てきた、村上五作さんによる、水
害の苦しみを描いた文章を一部紹介します。
昭和10～11年（1935～36）、統内新水路の工事が進
む中、しかし、洪水は完成を待ってくれません。明治
31年（1898）や大正11年（1922）の時以外にも、何度
も洪水はおそいかかってきたのです。

曲がっていた川 村上 五作
（前略）治水工事にのぞみを託し、統内原野の夜明け
を信じて、打内太に四戸、育素多地区に九戸の人たち
が住んで居りました。

昭和十年、島流しにされたような不安な気持ちで、
この地に分家して参りました私たち夫婦は、この人々
に暖かく迎えられ、新生活の第一歩を踏み出したので
した。私ども夫婦は、作付の済んだ畑を嬉しさに、一
生懸命除草管理に励み、近所の人たちも賞められるよ
うな作物に発育させました。

ところが、その夏の終りに、早くも一回目の試練が
やってきました。一町二反位作付した辛子を収穫した
その夜から降り始めた雨は、三日三晩降り続き、まだ
雨の晴れぬうちより十勝川は泡立ちをはじめ、その上、
大西風を伴い二十時間位増水が続き、川岸の耕地は見

るまに水没し、刈り取って荷穂に積んであった燕麦等
も、次々と流されてしまいました。

辛子は、手伝いに駆けつけてくれた本家の兄たちに
より二階に上げてもらい、かろうじて助かりましたが、
馬は、膝まで水につかりっぱなしでした。私宅は、普
通地より三尺位高い所にはありましたが、床上二尺、地
上四尺位の水がつかまりました。普通平地では、七尺位の
浸水だったと思います。（1尺＝約30.3cm）

燕麦類は流れ、豆類は全部腐れてしまいました。唯
一の収穫は、辛子三十俵位のものでした。勿論、家の
周りに積んであった薪もすっかり流れ去っていました。

次の年は、父の援助で作付をすることができました。
この年、春先より晴天続きで、「今年は良いでしょう」
と村の古老方も言われるし、私どもも、何とか今年は
穫らせて貰えるだろうと、張り切って作付も終り、小
学校で行われる地域運動会等を見にも行かず、除草に
努力しておりました。

七月の月上旬頃、長い晴天続きで、一雨欲しいと人々
が言っているうちに、待望の雨が降り始めました。七
月十一日だったと思いますが、人々の喜びも束の間、
雨は三日続きの豪雨となり、雨足が白いカーテンのよ
うになって風に送られては降りつぎ、それはすさまじ
いものでした。

四日目の夕方、雨は止みましたが、それから一昼夜
増水し続けました。そして、泥色の水は、畑や野菜を
ことごとく埋没してしまいました。「畑作物は、花時
を外れれば何とかなるものだ」という人々の期待を嘲
笑のように、水の引いて行った後より、豆類は、「ぐ
にやり」と倒れていってしまいました。麦類なども殆
どが枯れ、生き残った物も唯ポーっと実の入らない空
穂がお盆近くになってから出たくらいで、ビートも水
引きの悪い所は腐れてしまいました。（後略 p191）

（『豊頃よもやま話作品集 あかだも』より
漢字・かなづかいなどは原文のまま）



「十勝川統内新水路記念
碑」の位置。豊頃町、茂岩
橋下流の左岸堤防。
礼文内川がもとの十勝川。

6 些少(さしょう): わずかであること。少し。
7 豊頃よもやま話作品集 あかだも(とよころよもやまばなしさくひんしゅう あかだも):
豊頃町豊大学文学科(ぼうじゅだいがくぶんがくか)(1)が編集。

8 分家(ぶんけ): 親の家や農地(本家:ほんけ)から出て、新たに一家を構えること。
9 荷穂(にお): 豆やえんばくなどの作物を、クキごと刈り取ったあとがわがすために、
まとめて積みあげたもの。

第1章 十勝の平野や
川ができるまで
第2章 先史時代と川
第3章 アイヌ文化と川
第4章 十勝開拓と川
第5章 発展
そして未来へ
用語
さくいん

水田に水が引けるよう ... 千代田堰堤

地域産業

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

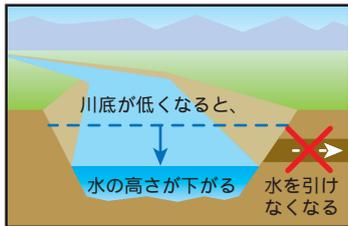
用語

さくいん

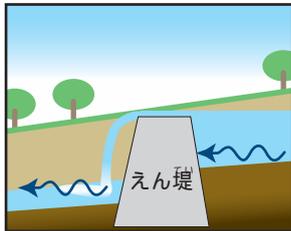


明治時代の終わりころ、千代田(池田町)に広がっていた水田。大正12年(1923)には、十勝川から水路を引くことになる。

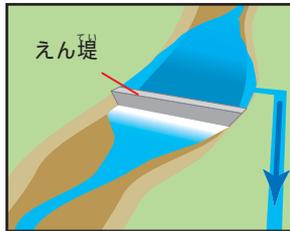
(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)



流れが速くなり、川底がけずられることで、水田への水が引けなくなる。(図はイメージ)



堰堤をつくと、流れが弱まり、川底がけずられにくくなる。



堰堤をつくと、水面を高くできるため、水を引きやすい。

千代田堰堤

千代田堰堤の工事は、昭和7年(1932)から始まり、長さ160m、コンクリートの堰堤です。千代田堰堤をつくることで、十勝川の水をいったんせき止めることができます。すると、水の流れがゆるやかになって川底がけずられにくくなるのと同時に、水面の高さが一定になり、水田への水をいつでも引けるようになります。

水を引くための施設もふくめて、昭和10年(1935)に完成し、千代田地区や利別地区(池田町)などの水田へ水を送りました。

明治26年(1893)、増田立吉が士幌川下流(首更町)で水田に成功しますが、十勝での米作りは大変でした。

開拓者たちの主食は、イナキビや麦、ソバなどで、季節によってはジャガイモやトウモロコシなどになりました。米のごはんを食べることができるのは、正月(とお盆)くらいだったのです。(右ページコラム・p173)

開拓者たちにとって、ふるさとで食べていた米のごはん、そして米作りは大きな夢でした。

蝶多(池田町千代田)でも、明治30年(1897)から米作りへのチャレンジがおこなわれ、明治32年(1899)に成功しました。

明治37年(1904)の豊作から、水田が増えていきます。

そして、大正12年(1923)には十勝川から水路が引かれ、千代田には水田が大きく広がりました。

新水路ができるとう水が引けない？

昭和に入り、千代田(池田町)の下流で統内新水路の工事(p190)が始まります。洪水を減らすために、十勝川の流れをよくする工事です。

ところが、川の流れがよく(速く)になると、川底がけずられるようになります。川底がけずられて低くなると、川の水面も低くなっていきます。そうすると、千代田の水田をうるおしていた水が引けなくなってしまっておそれがありました。

そこで、川の流れをおさえるためと、水田への水を引きやすくするために、堰堤(千代田堰堤)がつけられることになりました。



昭和10年(1935)完成した千代田堰堤。千代田や利別(池田町)の水田をうるおした。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

1 蝶多(ちょうた)千代田(ちよだ):池田町の地名。元はアイヌ語のチエオタ(『我ら・食べた・砂場』の意味《永田方正『北海道蝦夷語地名解』》)で、明治初期に蝶多村と当て字し、大正2年(1913)に蝶多が読みにくいと、縁起がいい「千代田」に変えた。

2 堰堤(堰堤:えんてい):川の水や土砂などをせき止めるために、川の流路を横断して建設された構築物のこと。

2段になった千代田堰堤 ... いろいろなところをよく見てみよう

千代田堰堤は、1段でつくられました。しかし、今、千代田堰堤を見ると2段になっています。

千代田堰堤は、農業用水取水せきと川底がけずれて低くなるのを防ぐ施設として、昭和10年（1935）の完成から、何度も洪水にたえてきましたが、少しずつそのダメージを受けました。とくに昭和50年（1975）の洪水の時には、えん堤下流の川底が水の流れて大きくけずられて、そのままではひっくり返るおそれが出てきました。

そこで、よりがんじょうにし、流れ落ちる水の勢いをやわらげるため、えん堤を2段にする工事が昭和51～52年（1976～77）におこなわれたのです。

千代田堰堤の「滝」の流れをよく見ると、下から向かって右側（左岸側）にはげしく流れ落ちる場所があります。えん堤の上はしが落としてあるのです。このすぐ上流に、農業用水を引くための取水口があります。

これは、流れる水の量が少ない時でも、取水口の所に水が集まるようにするための工夫です。

また、昭和51年（1976）の工事の時、魚が川をのぼりやすいようにと、右岸側に魚道もつけられました。

さらに、千代田堰堤のあるあたりでは洪水が流れにくくなっていたことから、平成19年（2007）、千代田新水路がつくられました。千代田新水路には「分流せき」があって、ふだんの水は千代田堰堤へ流し、洪水の時には新水路へも流すということができます。



第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

米を食べるのは特別なこと ... 盆と正月とお客さんのとき

明治30年（1897）、鳥取県から池田農場に移住した人たちは、池田へ向かう途中休ませてもらった家の人が、イナキビのおかゆを食べているのを見て、「自分達は郷里で米以外は知らなかったのびっくりした」といいます。（池田農場入地者の『昔をしのぶ座談会』）

入植してからは、「米なんかは盆と正月にしか食べられませんでした。お客さんが来るとやはり米のご飯を出したので、その残りが私達子供に当たるので客が来るのが楽しみ（丸山善二さんの話）」という生活になりました。

開拓者の子どもたちが学校で食べた、弁当の思い出を見つめてみましょう。

「米などは盆か正月ぐらいなもので、普通は稲黍飯に麦やアズキ（小豆）を入れた粗末なものでした（野尻久吉さ

んの話）」
 「明治末期に至り、米も試作されましたが主食を充たすことはできず、麦や稲黍が常食で季節には、唐黍や芋、南瓜の弁当もありました。昼近くになると、暖房のいりりの灰の中に芋を入れて焼いたのも思い出の一つです（堀井忠治さんの話：東台小学校開校記念誌『東台の灯は消えず』）」
 「弁当は稲黍や唐黍の入った握り飯であった（野村慈弘さんの話：池田小学校『開校六十周年記念誌』）」
 「麦や稲黍ばかりで育てられた私はまだ良い方で、十日川の奥から通学していた友だちの中には、毎日の弁当がソバだんごばかりで通っていた人もいたものだ（藤山諭さんの話：下利別小学校『開校六十周年記念誌』）」
 （「」の中は『池田町開拓夜話』より）
 （「」内、漢字・かなづかいなどは原文のまま）

3 左岸（さがん）：川の downstream に向かって見た時、左側の岸のこと。
 4 右岸（うがん）：川の downstream に向かって見た時、右側の岸のこと。

4. 開拓期は戦争の時代

地域産業
国際理解

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

人が、そして馬も戦場へ



明治39年(1906)、日露戦争勝利を祝い、利別市街(池田町)に建てられた凱旋門。



利別太(池田町)の名古屋孫太郎さんの負傷(実は戦死)の報せ。

(写真: 2点とも『池田町懐かしのアルバム』より)

開拓の時代は、日本が外国と何度も戦争をおこなった時代でもあります。

明治27~28年(1894~95)の日清戦争。明治37~38年(1904~05)の日露戦争。

そして、昭和12年(1937)から始まった日中戦争は、昭和15~16年(1941~42)の東南アジアへの侵攻、さらに太平洋戦争(第2次世界大戦)へと拡大し、昭和20年(1945)の敗戦まで続きました。(ほかにも武力による戦いは起きています)

十勝開拓が本格的になったのは明治29年(1896)から、十勝で徴兵がおこなわれたのは、明治31年(1898)からです。そのため、多くの十勝の人にとっては、日露戦争からが、大きなかわりを持ってきました。



明治37年(1904)、日露戦争で戦死した名古屋孫太郎さんの葬儀。洞寒村(池田町)の村葬としておこなわれた。

(写真: 『池田町懐かしのアルバム』より)

日露戦争と十勝

日露戦争の時、利別太(池田町利別南町)は、十勝川(今のオシタップ川)の舟着き場の街であって、十勝内陸で最も発展した市街地のひとつでした。(p175)

この利別太のある洞寒村(池田町)からも、何人かの若者が日露戦争に出征しています。遠く中国大陸で、ロシア軍と戦ったのです。

日露戦争は、日本の勝利となりました。利別太でも戦勝パレードがおこなわれています。しかし、非常に苦しい戦争で多くの犠牲がはらわれました。

洞寒村の名古屋孫太郎さん、岩間太吉さん、遠藤音治さんは戦死し、村による葬儀がおこなわれました。

馬も戦場へ

明治から昭和にかけて、農作業に、荷物運びに、さまざまな工事に、そして馬車にと、馬は大きな力を発揮しました。

そのため、とくに馬産地としても有名な十勝では、馬に対するさまざまな思いから「馬頭観音(馬頭観世音菩薩)」がたくさん設置されています。(p199)

馬は、戦場でも兵士や武器などを運ぶのに、大きな役割を持っていました。軍馬として育てられたものだけでは足りないので、徴発といって、農家などの馬が買い上げられます。

十勝からも多くの農耕馬が大陸にわたり、戦場で働きましたが、敗戦後、置き去りにされ、ほとんどが殺されたといえます。



軍馬として徴発された馬「玄海号」。飼い主である村田さんも昭和17年(1942)召集されて戦場に向かった。

(写真: 『池田町懐かしのアルバム』より)

1 軍馬(ぐんば): 軍馬のほか戦争に利用された動物には、犬(軍用犬・主にシェパード)もある。

2 徴発(ちようはつ): 強制的にものを取り立てること。とくに、軍隊が使うものを集めること。

3 武運長久(ぶうんちようきゆう): 戦いでよい運がずっと続くこと。

十勝空襲と敗戦

国際理解

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展そして未来へ

用語

さくいん



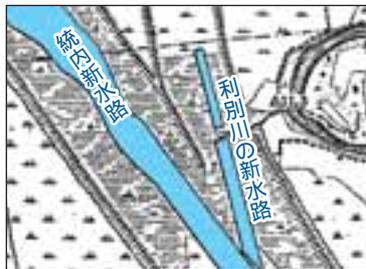
日中戦争が始まり、昭和12年(1937)、出征する兵士たち。池田神社(池田町)で武運長久(3)を祈る。(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)



(右)アッツ島に上陸した日本軍守備隊。昭和18年(1943)、全めつした。



(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)



昭和21年(1946)発行の地形図。利別川の新水路工事が途中で止まっている。

(国土院蔵の1/5万地形図(十勝池田)使用)

統内新水路(p190)が通水した昭和12年(1937)、日中戦争が始まりました。戦争は長期にわたります。

昭和15~16年(1941~42)、日本軍はフランス領インドシナ(ベトナム)へ侵攻します。

昭和16年(1942)、日本はアメリカ・イギリスに宣戦布告して太平洋戦争が始まります。戦線は、東南アジアからオーストラリアまで広がりました。

昭和17年(1942)以降、日本軍は南方の戦いに負けることが多くなります。昭和18年(1943)には、北方のアッツ島(アリューシャン列島)で守備隊が全めつします。

北の強化のため、昭和19年(1944)、帯広の第7師団(熊部隊)など、十勝各地にも日本軍部隊が駐屯します。

昭和20年(1945)、東京空襲などの本土空襲、沖縄での地上戦、広島・長崎への原爆投下、ソ連の対日参戦などを受け、他国民もふくめて数百万~2千万人以上ともいわれる戦争犠牲者を出した末に、日本は降伏しました。

戦争によって止まった河川工事

十勝川に続いて、利別川でも新水路をほって、統内新水路につなげる計画でした。

工事は昭和12年(1937)に始まりました。しかし、戦争が長引き、激しくなる中で、昭和18年(1943)には工事が中断されてしまいました。(p206)

工事用の機械や機関車は、中標津の飛行場建設などのために持っていけませんでした。

工事の再開は、敗戦後の昭和25年(1950)を待たねばなりませんでした。

十勝空襲

十勝からも多くの方が戦場に行き、傷つき、戦死しました。帯広市史の戦没者名簿だけで、1,465名もの方が載っています。

戦火は十勝にもやってきます。昭和20年(1945)7月14日と15日、アメリカ軍の飛行機が十勝各地をおそいました。

14日には、池田町・豊頃村・帯広市・音更村・幕別村が、15日には、本別町・帯広市・音更村・大樹村・大津村(厚内)・浦幌村・広尾村・土幌村・幕別村・大正村(上更別)が、空襲を受け、60名が死亡しました。

とくに、本別での空襲は激しいものでした。およそ50分間、40機以上による爆弾・機銃などの攻撃を受け、亡くなった人40名(うち女性23名)、けがをした人14名、全焼した家279戸、罹災した人1,915名という、大きな被害が出ました。



本別を攻撃した爆撃機のひとつと同型機

空襲を受け、炎上する本別市街。このけむりの下で、40人もの方が死んでいった。(写真:2枚とも本別町歴史民俗資料館蔵)

4 本別での空襲(ほんべつでのくうしゅう): 本別を空襲したアメリカ軍機の攻撃隊は、帯広など別の攻撃目標を持って空母から飛び立ったが、当日十勝が雲におおわれ目標を見つけれなかった。その後、たまたま雲の切れ間の下に本別があったため、各攻撃隊

の隊長判断で攻撃を決めたという。本別とは思わず、池田だと思って攻撃した攻撃隊もあったらしい。(参考:『記録本別空襲(本別町図書館、1983)』、「トカッチ16号(2004)」の『アメリカ海軍資料に見る北海道空襲(松本尚志)』)

5. 開拓者の心や思いと川

開拓者たちの信仰

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん



おついなりにんじや とよこちやうおつ とかちじんじや ひろおちやう
大津稲荷神社(豊頃町大津)。1830年に始まる。十勝神社(広尾町)に次いで古い。十勝内陸に向かう開拓者たちは、ここで今後の安全と平和を祈った。



しやうこうじ ふどうどう おびひろ
(左)松光寺の不動堂(帯広市)。明治35年(1902)に晩成社が建てたお堂が残っている(場所は移された)。



おびひろじんじや
帯広神社、秋祭りのみし。

宗教と教育

明治16年(1883)、帯広に入植した晩成社の幹部たちは、キリスト教徒でした。そのため、内陸開拓が始まったころから、とくに帯広では、キリスト教の活動が始まっていました。

晩成社の渡辺カネは、移住するとすぐに開拓者の子どもやアイヌの子どもたちのための教育を始めています。キリスト教の宣教師が「教育所」をつくることもありました。

また、寺は人々が集まって学び、交流する場所ともなります。寺や説教所は、僧が先生となって子どもたちに教育する「寺子屋」や「簡易教育所」となることがよくありました(p168)
開拓初期には、宗教関係者が教育者ともなったのです。

開拓は、なれない風土や自然とのたたかいでした。
開拓者たちの心は、苦しさや不安、そしてさびしさに、おしつぶされそうにもなりました。楽しみもなく、教え導いてくれるものもなかなか見つけれられません。

そんな開拓者たちの心を支え、安らぎをあたえるものとして、寺や神社などがつくられていきました。

仏教は、とくに団体入植の場合、ふるさとで信仰されていた宗派がそのまま持ちこまれました。つらい暮らしのため、祖先をまつ意識がふるさとにいた時よりも大きかったといえます。

いくつかの地方から人が集まってくる大農場では、小作者それぞれの宗派とは関係なく、農場が決めた宗派から僧を送ってもらって説教所をつくりました。

(団体入植・大農場 p166)

神社の祭りは大きな楽しみ

神社は集落や入植団体ごとに設けられることが多く、中には高さ3mほどの角材を仮に立てただけ、というものもありました。

開拓者たちの生活は、きびしい仕事に追われる毎日、遊びや楽しみがほとんどありません。

春や秋におこなわれる神社の祭りは、信仰としての意味のほかに、村をあげての娯楽の場でもありました。

村人が集まり、故郷のおどりをおどり、出し物や競馬に喜び、開拓の苦労話に花をさかせて、一日を楽しく過ごしたといえます。



のむらじきやう せつきやうじよ いけだちやう てらこや
明治31年(1898)、野村慈教が建てた説教所(池田町)。寺子屋教育もおこなわれた。(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)

1 開拓者たちの信仰(かいたくしゃたちのしんこう): この項目では、開拓者たちを信仰が支えたことについて述べています。宗教の紹介という意味では不十分であることをご了承ください。

2 小作者(こさくしゃ): 土地を借りて耕し、土地に割り当てられた小作料をはらう農民。
3 宗教関係者が教育者(しゅうきやうかんけいしやがきやういくしや): 今でも十勝には、仏教系の学校や幼稚園、キリスト教系の幼稚園などがある。

「馬頭さん」に馬への愛情をこめて... 十勝各地にある馬頭観音

十勝は馬の産地として有名で、「馬産王国」ともいわれました。機械化が進む前までは、馬はとても大きな存在だったのです。

開拓を進める中で、田畑を起こし、作物などの荷物や木材を運び、工事で働き、草競馬で、また戦争で、馬は大活やくをしました。

農民たちにとって、馬はただの家畜以上の存在でした。馬を人が住む家の土間に飼い、家族のような思いであつかったといひます。

こうした、大切な馬への思いから、十勝の多くの場所に「馬頭観音（馬頭観世音菩薩・馬頭さん）」が置かれています。

文字をきざんだもの、石の像、木ぼりの像、色をつけた像、中には馬に乗った観音像もあります。

馬を守るため、馬が死んだ時にその霊をなぐさめ感謝するため、また、戦場へ連れて行かれた馬の活やくと無事を祈るため、など十勝の馬頭観音にはさまざまな思いがこめられているのです。

(p 196)



帯広市大正町にある「新西国三十三番観音菩薩」の中の馬頭観音像。



新西国三十三番観音菩薩の位置。
帯広市大正町東4線。



川の工事でも活やくする馬。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

もう少し細かいこと

神道の神々とカムイ

神道では、「八百万の神」といって、とてもたくさんの神がいます。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教などが「ただ一つの神」としているのと大きくちがいます。

とくに、民間信仰では、さまざまなものが信仰の対象となっています。正月になると、鏡もちを供え、門松をたて、自動車から洗たく機、台所などにも正月かざりをつけます。これはものにも靈魂がこもるのだ、という思いがあるからです。

自然についても、水神、山の神、雷神、木の神、風神などがいて、それぞれがまつられ、祈りの対象となってきました。

どこか、アイヌの人たちの「カムイ」と似たところも感じられます。

神道は、かつて、大和朝廷、そして「日本」ができていく中で、各地の人たちが信じていた神々を組みこむことでできたのだらう、と考えられています。

和人の神々も、ずっと昔はカムイのようだったのかも知れません。

(カムイ p 134)



(上)自動車につけられた正月かざり。



(右)木を切る作業の前に、「山の神」をまつる。(豊頃町)

(写真:『豊頃町史』より)

4 馬頭観音(ばとうかんのん): もともとは、観音様が変身したすがたの一つで、迷いをなくし悪を破壊(はかい)する菩薩(ぼさつ)だった。それが、時がたつうちに、馬を病やケガから守る力をもつものとして、信仰(しんこう)されるようになっていった。

5 ユダヤ教・キリスト教・イスラム教: これら3つの宗教は、呼び名はちがうが、同一の神を信仰する。ユダヤ教やキリスト教ではヤハウェ(エホバ)といい、イスラム教ではアラーと呼ぶ。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語

さくいん

水の神、灯ろう流しや雨ごい

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



鈴蘭公園(音更町)下の河川敷にあるわき水。「不動明王」がまつられ、右写真のように「龍神の滝」の石碑もある。



灯ろう流し。

雨ごい

大雨による洪水とともに、雨が降らないことによる干ばつも、農業にとっては大きな痛手となります。

十勝でも雨不足が起きたことがあり、こうした時には、神に雨を願う「雨ごい」がおこなわれました。

昭和5年(1930)に池田町でおこなわれた雨ごいでは、数人がみのを着て笠をかぶり、然別湖(鹿追町)まで水をもらいに行きます。地元に残った人たちは、丘の頂上で祈りをしていました。

然別湖から水をもらった人たちが大森(池田町)に着いたとたんに大雨になったといいます。

和人にとっても、アイヌの人たちと同じように、川はありがたいものであり、そして恐ろしいものでした。

水の神である「水神」に対する信仰は古くからあり、水分神社などが水源や川の合流点にまつられています(奈良県の吉野水分神社など)。

また、竜(龍)やヘビを水の神や川の神として考えることも多く、「八岐大蛇(8つの頭と尾を持つ大ヘビ)」の伝説は、支流を持つ川の洪水の話とも考えられます。福井県の九頭竜川(p165)は、その名前から、「九つの頭を持つ竜」としておそれられていたことがわかります。

音更町鈴蘭公園の十勝川河川敷では、ガケからわき出る水が「龍神の滝」「滝の不動」として、まつられています。

灯ろう流し

川の水や流れは、罪やけがれを清め流す、と考えられてきました。また、川の流れは死後の世界とつながっていると考えられ、お盆には亡くなった人を思って供え物を流したり、灯ろう流しをしたりといった行事がおこなわれてきました。

鹿追町の然別湖や中札内村の恵津美川などでは、毎年、灯ろう流しがおこなわれています。

死者への思いだけでなく、川や湖をいつまでもきれいに、という思いもこめられています。最近では、そうした考えから、流しっぱなしではなく下流で拾い上げるようになってきています。



美しい水をたたえる然別湖(鹿追町)。昭和の初めころは、やっと観光開発が始まったところで、今よりはるかに山おくであるイメージが強かった。

1 八岐大蛇(やまたのおろち): 日本書紀(にほんしょき)などに描かれる神話の大ヘビ。スサノオノミコト(須佐之男命)に退治される。斐伊川(ひいかわ: 島根県・鳥取県)のことだといわれている。

2 不動(ふどう): 不動明王(ふどうみょうおう)のこと。仏教の信仰対象で、密教(みつきょう)の根本尊(こんぽんそん)である大日如来(だいにちにょらい)(またはその使者)が悪魔を降伏するために恐ろしいすがたをしたもの。その心はきびしくもやさ

和人がつけた川の名前



明治29年(1896)発行の地形図。今の美生川は「ピバイロ川」であり、「美生」村には「ピバイロ」とふりがながあてられている。
(国土地理院所蔵の1/5万地形図(帯広)を使用、着色)

十勝の地名や川の名前には、アイヌ語名に和人が当て字をした名前がたくさんあります。

例えば、「利別川」は「トゥシペツ」で「縄(ヘビ)川」。「札内川」は「サツナイ」で「かわく川」の意味です。「別」や「内」は、アイヌ語の「ペツ」「ナイ」(どちらも川の意味)に当てられた漢字なのです。(p127)

中には、美生川や歴舟川のように、もともとはそれぞれ「びばいろ(ピパイロ:カワシンジュ貝・多い)」「べるふね(ペルッネイ:水・大きい・者〔川〕)」と読まれていたのが、あとで「びせい」「れきふね」と読み方が変わってしまったものもあります。

一方、和人が、新しく自分たちの思いをこめてつけた名前もあります。

開拓や特産品に関する名前

幕別町には、糠内川支流に「五位川」が、音更町には然別川支流に「矢部川」があります。

「五位」は富山県からの開拓団体である「五位団(五位団体)」が入植したところに、また、「矢部」は富山県の「矢部団」が入植したところついた地名です。どちらも、その場所を流れる川の名前にもなりました。(p167)

また、開拓後についた地区名からついた川の名前としては、士幌町の「共成川」や「北開川」などがあります。

清水町の「御影川」は、御影という地名(もとは村名)からつけられたのですが、この地名は特産品の御影石(花崗岩)から名づけられたものです。石が地名になり、川の名前になったのです。(p31)



音更町の矢部川と、幕別町の五位川。どちらの名前も、富山県から入植した開拓団体の名前からつけられた。
(国土地理院刊行の1/2万5千地形図(駒場・糠内)を使用)

人の名前も

暮らしていた人の名前がついた川や、その川の利用方法、あるいはその場所の自然からつけられた川の名もあります。

音更町の長流枝内川支流には、「小栗沢川」「林の沢川」「関根沢川」といった川があり、それぞれ、小栗さん・林さん・関根さんの名前からつけられました。

また、帯広市の「機関庫の川」は、かつてこの川から製糖工場の機関庫に水を引いたことから、こう呼ばれるようになりました。

そのほか、陸別町には利別川支流に「陸別熊の沢川」が、そのさらに支流には「熊泣川」「熊追川」など、クマが多かったことから名づけられた川があります。



地形図には小栗沢川や林の沢川はのっていないが、セキネザワ(関根沢)川はある。
(国土地理院刊行の1/5万地形図(十勝池田)を使用)

しいといわれる。
3 みの(蓑): 伝統的な雨具で、ワラなどで作られたレインコート。
4 笠(かさ): 伝統的な雨具で頭にかぶる。板、竹、イグサなどで作られた。

5 機関庫(きかんこ): 機関車のための車庫。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今そして未来へ

用語 さくいん

参考となる本など (順不同)

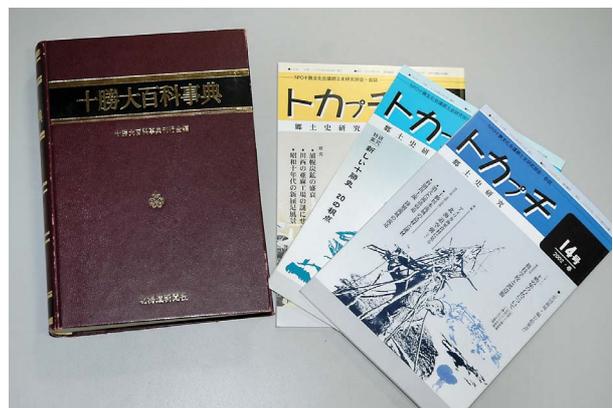
くわしい参考・引用文献 → p256

「各市町村史など郷土史」



十勝の各市町村史。新しいもの。もっと前に出されたものがそれぞれにあり、新しいものにはない記述や書き方がなされていて、興味深い。また、もっと限られた地域の郷土史もあり、よりくわしい話が読める。(帯広市図書館蔵)

- 「十勝大百科事典」十勝大百科事典刊行会 編、北海道新聞社、1993
- 「十勝川の川舟文化史 滯標」十勝川川舟文化史「滯標」編集委員会、十勝川川舟文化史「滯標」刊行会、2004
- 「十勝20世紀 激動100年の軌跡」十勝毎日新聞社、2001
- 「池田町開拓夜話」池田町企画振興課・池田町史編纂室、池田町、1993
- 「池田町懐かしのアルバム 写真で綴る池田町史」池田町企画振興課 池田町史編纂室、池田町長石井明、1992
- 「豊頃よもやま話作品集 あかだも」豊頃町豊寿大学文学科、豊頃町、1991
- 「ふるさとの語り部」帯広百年記念館 編
- 「トカッチー郷土史研究」『トカッチ』編集部、NPO十勝文化会議郷土史研究部会 (年1回発行)
- 「十勝二万年史」十勝川流域史研究会、1985
- 「十勝川 写真で綴る変遷」『十勝川 写真で綴る変遷』企画編集委員会、(財)河川環境管理財団、1993
- 「茂岩・池田河川事業所史 十勝川下流のあゆみ」北海道開発局帯広開発建設部池田河川事務所 監修、『十勝川下流のあゆみ』編纂アドバイザー会議 編集、(財)北海道開発協会、2003
- 「十勝自営会創立100周年 十勝の監獄」磯谷悠三、十勝毎日新聞社、1882
- 「20世紀全記録 Chronik 1900 - 1990」講談社、1991
- 「エソテリカ事典シリーズ2 日本の神々の事典 神道祭祀と八百万の神々」日本アートセンター 編集制作、学習研究社、1997
- 「新北海道史年表」北海道 編、北海道出版企画センター、1989
- 「アイヌの歴史と文化 I」榎森進 編、創童社、2003



「十勝大百科事典」と「トカッチー郷土史研究」。

絶版などでご覧になることができない場合があります

第1章 十勝の平野や川が広がる十勝

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さへん